念も薄らぐ譯である。そこへ往くと、女史の演說の遣方は頗る好い。誠に簡にして要を得て居るから、敎師も生徒も、大變悅んで居り、公衆の退屈をも招かぬのである。

▲『演說や講話は、何も長くやる許りが能でない。簡にして要を得ればそれで可いのである』とは女史の持論ださうで、それは女史が、多年種々の境遇を經て、散々人の演說も聽き、又散々人にも演說した結果、何うしても長いのは不可ぬと覺られたからであらう。

三輪田眞佐子女史の演說振

▲又女史の講話は、儒敎主義で終始一貫し、然かも陽明の學を好まるゝから、中江藤樹などが能く引例に出る。尤も女史が陽明學を奉ぜらるゝのは、其由來遠して、嚴父宇田栗園氏は、梁川星巖の門人であるから、女史も幼より香蘭女史の薫陶を受けられ、一時梁川家の養女にまで懇望された位で、女史の今日あるは、全く其時の素養が根本となつて居る。

▲所が良人の元綱氏は、純粹の國學者で、尊王攘夷の說を唱へ、例の尊氏の木像の首を斬つた張本人であると云ふので、七年間富岡藩へ幽閉せられた位の人だ。當時儒者と國學者とは、氷炭相容れざる間であつたが、國學者と漢學者と夫婦になつた異樣の家庭も、琴瑟常に和して、枝を鳴らす風だになく、圓滿の家庭よと羨まれたのも、畢竟女史が淑德の致す所である。

▲從つて女史は、其良人より國學を受られ、又夙に泰西の文物に着眼して、頻りに英書を研究され、多年一日の如く女子敎育に從事せらるゝので、其辯舌の如きも、根底が確乎として居るから、循々として規律あり、節制あり、冗漫に失せず、然も

時世遲れにならぬ所以てあるのだ。

▲女史は又お年に似合はず音聲が好く、如何なる大講堂でも、隅から隅まで能く聽える。何ても人に能く聽えるやうにと、平生から工夫して居らるゝさうで、演說が濟んで歸邸されての後、從者に向はれて『お前は末席の方に居たやうだが、明瞭と演說が聽えましたか』と質かるゝのが例てあるさうだ、然し聽衆も少なく、會場も狹い場合は、又夫相當の聲を出されるので、場所の廣狹、聽衆の多少に依つて、聲の加減もし、調子を取らるゝ事は旨いもので、なか〳〵老功な所がある。

▲初代清本延壽太夫が客に招かれて、得意の『梅の春』を語るに、六疊か八疊の小座敷て語るのと、何十疊と云ふ大廣間で語るのとは、聲の調子、節の廻し工合に、自から呼吸が違ふので、餘程其工夫に苦心したものださうだが、名匠の用意周到なる事は、誠に感服の外はない。學問ても遊藝ても、其揆一なりてある。

▲態度も亦溫厚實着、至つて品の好い御隱居樣? てはあるが、唯、六十七歲の御老人てありながら、紅裏の衣服はそれは儀式のもので、又紅裏は暖いから、老人には可

いとしても、金時計金鎖、金の指輪の三つも嵌めて、イヤにピカ〳〵させ、平氣て壇へ上らるゝのは、却つて威嚴を殺ぎ、人に惡感を催さしめ、見た許かりてウンザリするから、あれ丈けお止しになつたら宜からうと、餘計なおせッかいだが御忠告申上げて置く。

(三六) 棚橋絢子女史

三輪田女子との比較——若く見える——瀟洒した風采て活氣がある——令息の奧樣と間違えらるゝ——『小學』がお得意——白襟の下へハンケチ——縱布絹布の羽織

(上)

▲女史と三輪田眞佐子女史とは、同功一體の人てある。操行閱歷其他に於て、殆ど類似の點が多い。先づ年齡から略似て居る。刻苦辛慘の經歷も似て居る。良人に仕へて貞淑の點も似て居る。一人の令息を(三輪田氏のは貰子だけれど)育上げられた點も似て居る。又其令息が共に文學士て、同じく敎育に從事さるゝ點も似て居る。兩女史共に儒敎主義なる點も似て居る。然し辯舌と態度の上に於ては大に相違があ

るのである。

▲絢子女史(六九)は眞佐子女史(六七)よりも年長者でありながら、却つて若く見える。何うしても五十位にしか取れない。從つて演壇に立たれたる態度も、三輪田女史よりも活氣があり、又瀟洒とした風采て、金ピカ物など餘り用ゐられぬ處が嬉しい。令息一郎氏は、既に白髪が生えて、割合に、フケて居る處へ、女史は又ズッと若く見えるから、地方などへ令息と共に出張さるゝ場合に、知らぬ人は『奥さんて居らつしやいますか』と聞く『イヤ、これは母てございます』と言はれて『道理て奥さんにしては、少し、フケて居らつしやると思ひました』など、問違られる事があるさうだ。

▲女史の良人嘉忠氏は通稱大作と言はれて、有名な盲人て漢學者だ。雨森芳洲の學風を慕はれて、經學もあれば文章も詩もなか〳〵旨い。女史は其良人より學問藝術を受けられ、大作氏の晩年の文章は、すべて女史が代作して居つた位だから、女史の學問は根底が深い。例の中原氏の成立學校時代より、女史の薫陶を受けた人々が

集つて、自得會と云ふを設け、一週一回女史の『小學』の講義を聽聞して居るが、其講義が、如何にも該博精密なものであると云ふ評判だ。

▲女史は非常に勤儉質素を旨とせらるゝので、各學校て受持の倫理科の講義をされる場合、偶には公會の席上でも、態〳〵白襟を開けて見せ、又は筒袖襦袢の先きを出して見せ『皆さん、女子と云ふものは、何でも儉約をし、物を大切にする心掛けが第一て、御覽の通り私は白襟の下へハンケチを卷いて居る。又老人て寒いから筒袖襦袢を下に着て居りますが、先きの見える物丈絹にして、中

棚橋絢子女史の演説振

はフランネルです、斯樣に一寸の布でも無駄にせず、繼布剩布でも體裁よく工夫すれば、立派に役に立ちます』と訓誡せられる。誠に女らしい優しい所があるので、門生等は、皆女史に心服して居る。

(下)

演説に癖が多い——經歷の御自慢——令息の御自慢——お嫁さんの惡口——井上通女と紫式部——衣紋を作る癖

▲女史の演説には癖が多い。中でも第一に出るのが御自分の自慢だ、『女で見識があると云ふのは、何だか生意氣のやうに聽えますが、女だとて相當の學問をして、智識を磨けば見識の立つものです』それから嫁入の翌日出入の醫者が來て、女子は見識のないものだと云たのに奮慨して勉强した事や、盲人の夫を補けて故郷大坂を出て、諸方流浪して苦闘した事などを、何れの會でも、上方辯ではあるか、滔々と述べられる。夫故世間では、棚橋は自分の自慢ばかりして居ると、少し鼻について居る氣味だ。然うすると女史は辯解して『自分は好んで耻を話す考はない。何の會へ往つても、會主から貴方の御經歷を御話願ひますと言はれるものだから、ツイいくらか若い人の爲めにもならうと思つて話すので、決して自慢とか得意とか云ふ譯ではない』と。

▲第二に令息の御自慢が出る、『悴の一郎も、私が若い時分から嚴重に育てましたから、割合に親の言ふ事も聽きまして、夫や私の、申付けた事は、決して背かずに、學業も熱心に勵みまして……』など述べられるのが例である。尤もこれも若い者の爲めを思つて御話になるので、決して御自慢と云ふ譯ではあるまい。

▲第三にはお嫁さんの惡口がちよい〳〵出る。尤も罵詈讒謗的でない。唯優し過ぎるとか、私のやうにハキ〳〵しないとか云はれる位のものだ。然し世間の噂では此お嫁さん(即ち一郎氏の令閨俊子)は所謂女らしい人で、溫良貞淑お姑にも能く仕へ、良人にも無論能く仕へられる。人の前では口も碌々利かぬ位な溫順家で、其淑德の上に於ては寸分申分ない方で、學校の生徒杯は非常に同情して居るとの事だ。それは女史の如く青春初緣の身を以て、好んで失明者の妻となり、忍耐、勤勉、刻苦、精勵以て、今日あるを致し、教育界の元勳と迄言はる〻女豪傑の眼から見れば

▲女史は儒教の中でも朱學を好まれ又國學では井上通女の學風を好まれ、三輪田女史は陽明學を奉ぜられて、國學では紫式部を尊信されて居るので、演說の中にも自然それが餘計引例に出る。然し單に辯舌の上から云へば、三輪田氏はスラリとした癖のない辯で、簡にして要を得て居る。柳橋氏はちよつと癖があり又活氣もある。

▲所が態度風采の上から云へば、絢子女史は至つて淡泊で、すべてジミであるが、眞佐子女史の方は、藤色の娘でも着さうな、然かも衣服と同じ長の被布など召して一體に派手作てあるにも拘はらず、眞佐子女史はフケて、絢子女史は若く見えるから妙だ。

▲然し絢子女史の態度にも一つの癖がある、演壇に立ちながらちよい〳〵衣紋を作つたり、又首を前へ出して、兩手でヌキ衣紋と云つたやうな風をされる。又近來は右の手を胸へ當てヽヒョイとしなをなさる。是等は何も取立てヽ云ふ程の事でもないが、能く眼に付くから一寸附記した迄だ。

（三七）海老名彈正氏

（上）

音聲が美い――風采も好い――眉の上の黑子――最後の一段――手を擧げ指を擴げる癖――安中時代と熊本時代――辯舌が田舍臭かつた

▲氏の說教振は、第一に其朗々たる音聲が美い。第二に風采が如何にも好い。丈も高し、房々したる美事な髮髯には、近來多少の白毛を交へて一段の崇高を加へ、右の眉の上の大きな黑子までが、何となく威嚴を添えて居る。說方も、最初は諄々と理性に訴へて、最後に自身の確信を述べられ、他の意志を動かす事に重きを置かれる。尤も初めて聽く人には、氏の說教なり講話なりが、冒頭が非常に長く、中頃で少しタルミを生ずる氣味があるので、退屈して倦怠を來す事もあるやうだが、さて最後の一段となると、卓勵風發、言ふに言はれぬ旨味があり、非常に人を感發せしむるのである。故に氏の辯舌の大眼目は最後の一段にあるのだ。

▲氏の態度に就いては、別にこれと云て癖もないやうだが。唯、說が妙所に進み、

體を搖かし手を擧げらるゝ場合に、五本の指が悉く開く、西洋人は、重に指と指とを堅く、相接して居るやうだが、日本人に兎角指を擴げる。氏も又何方かと云へば指を擴げられる方であるが、此外に癖と云ふものは少しもない。體を少し前に屈し過ぎはせぬかと思はれる所もあるが、概して姿勢に癖のない方である。

海老名彈正氏の演說振

▲氏も、今では第一流の牧師て、海老名か植村かと稱はれる程の聲望家であるから、辯舌も、所謂圓熟の老境に進んだとは云ふものゝ、其昔、正統派から異端視され、繼子扱ひをされたり、又例の安中時代に、基蘇教同盟會などて演說した時分の方が、單に辯舌の上から云ば何うも活氣があつたやうに思ふ。安中時代の氏の辯舌は、艶々しい派手な所があり、氣慨に滿ちて、何となく生々して居つたから、聽いて居て、餘程興味を感じたのである。然し氏が一時熊本から歸京された時分は、辯舌が田舍臭くて、是では迚も東京へは向くまいと思はれた程たが、今ては其樣な痕跡は無論消失せて了まつた、

(下)

國體と基督教の調和——氏と加藤博士と辯の難攻擊——氏と植村氏との比較——一種の思索——名物に旨物なし——疾風枯葉を捲くの概——尻上りの演說——斯界第一流の辯者——人を褒めるのが上手——頭腦を有せる操盲者風——簡潔

▲氏の演說は、所謂愛國者的で、國體と基督教との調和を計ると云ふ考て居らるゝやうだ。夫故加藤博士の新著に對しての一擊は（雜誌太陽及新人所載）實に巧みであつた。現に青年會館の演說に於て、博士の議論を攻擊し、又は嘲笑した手腕は、頗る妙を極めた。是等は氏の最も得意とせらるゝ所である。又其の演說を聽くと、氏は基督のDeity を否定して、Divinity を信ぜらるゝが如くに見える。然し是等高

尙複雜なる敎理は、我々門外漢の覗知すべき所ではないから、詳しく言ふ事は出來ぬ。

△氏と植村とを、比較的すると、植村氏は割合に雄辯でもなく、又納辯でもない、宗敎的感情に深く、文學趣味に富んで居らるゝから、言語が詩的である。而かも非常に信念を重んぜらるゝかのやうに見える。所か氏は、別段文學者でもないから、說敎や講話が詩的ではないけれども、一種の思索がある。何方かと云へば、思想に長けて居らるゝやうで、自然それが辯舌の上に現はれるのである。

▲余も隨分說敎を聽いては見たが、名物に旨物なしで、大低の說敎では何も得ずして歸ることもあるが。氏の說敎に限つて、いつも何かしら一種得る所ある如くに感ぜらるゝのである。其邊もあらうが、氏の崇拜者は重に學生である、就中大學生に信仰者を多く有つて居らるゝのは嬉しい次第である。

△氏の演說は、雄辯法に適ふとか、又は言語を斯う云ふ風に組立つるとか云ふ、形式に拘泥せられず。唯、熱心に演說を爲るのであるから、少しも作意の迹が見えず少しも癖がなく、又議論の佳境に至る時は、疾風枯葉を捲く底の概がある。それに一體日本人の演說は、初め聲を太くし、終りを細くする、所謂尻下りであるから、兎角に聲の拍子拔けがする。西洋人は、初め細く終りが太く、尻上りで、譬へば『斯くの如く社會の腐敗したのは、(以下大聲にて)如何なる原因であるかと云ふ調子だから、聲に力がある。從つて自然人に印象を與へる。所が氏の辯舌は丁度西洋風で、威嚴ある態度で、頗る尻上りに述はれるので、言語に力が籠るのである。確かに氏は斯界第一流の辯者であらう。

▲夫に氏は人を褒めるのが上手だ。全體人を誹る事の上手な人は多くあるが、人を褒めるに上手な人は少ないものである、氏はなか〳〵御世辭が旨い。人を褒めると云ふ事は、世を渡るの必要條件であつて、萬事成功の基となる。氏は他の些細なる功も大に賞讃するから、會員諸氏は喜んで氏の爲めに忠勤を勵むのであらう。氏の敎會の今日あるは、或は其邊の氣味合ひなきにしもあらざるべしだ。演說の上でも滅多に他を攻擊さるゝやうな事はない。

▲氏は哲學家的口調の所もあるが、無論冷やかな所はない。頭腦を有せる豫言者風である。今や氏も老熟の境に入り、時としては全て老爺の子孫を訓戒する如き調子も見える。これが即ち氏の本領であらう。

▲然し氏にも缺點はある。それは冒頭の長過ぎる事である。以前日曜の說敎などは大低一時間半を費したものだが、今では一時間位で濟む事になつた。それでもまだ〳〵冒頭が長過ぎる。下手は說敎長かるべからず、上手なりとて長きを要せず、演說の失敗は往々これに基因するものである。地方などでは、氏の說敎を皆まで聽かず、中途で立つ者すらあると云ふのは、實に殘念ではないか。故に出來得るならば今少し序文を簡潔にしたならば、完璧に近いだらうと思ふ。要するに果物の成熟はやがて腐敗を生ずるので、氏が演說の圓熟も、若し老朽の源因たらずんば幸である氏、年齒正に五十、猶壯なり、乞ふ奮勵して層一層の大成を期せられむ事を、偏に希ふ次第である。

（三八）嘉納治五郎氏

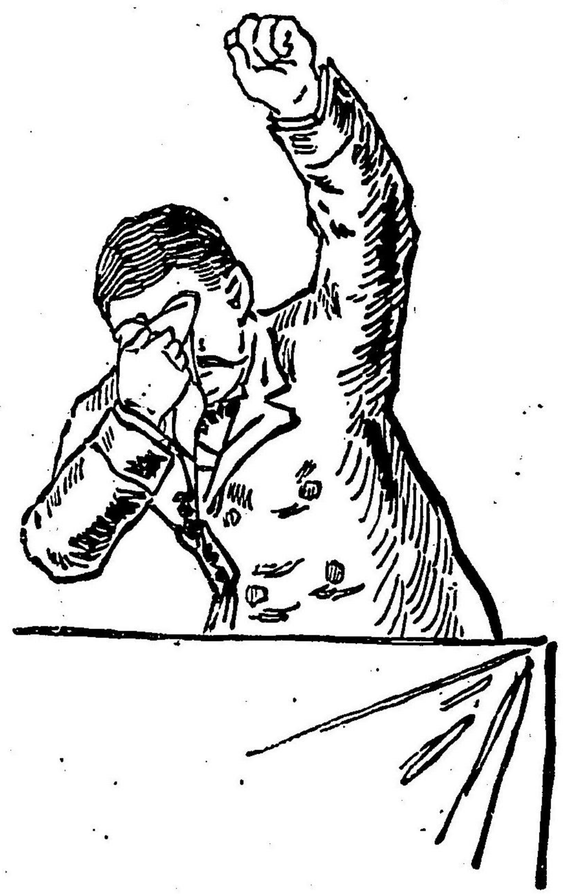
熱誠あり、氣魄あり——皮相の敎育——日本固有の婦德——聲を放つて泣く——力を右腕に籠めて卓を亂打す——言々肺腑より出づ——一語一涙——ペイ〳〵ぢやない

▲氏の演說は、熱誠あり、氣魄あり、而かも同情に富む。昨年五月横濱市に開かれた、第五回關東聯合敎育大會、氏が『敎育の眞價』と題して述べられた演說は、頗る壯烈を極め、充分に氏の本領が發揮されて居るから、今其の一節を紹介する事としやう。

▲氏は壇に上るや、先づ『諸君』と叫び、輕く卓を打ち『世の中では頻りに敎育〻〻と云ふけれど、唯、皮相の敎育では何にもならない。譬へば洋行をして、歐米文物の美に醉ふて、萬事歐米崇拜となり、我國固有の美風をも、其根底より打破せんとするものゝあるのは、實に慨嘆の外はない。女子敎育もさうだ。苟も世界各國、國と國と相對立して居る以上は、或は已むを得ずして干戈を交ゆる事もあらう。然

し有事の日許りではない。平生に於ても、國の文明を進め富國強兵の實を擧げやうとするには、始終其心掛けがなければならぬ。又日本國民として、最も此點に重きを置かなければならぬのだ。此大目的を達する上に於ては、假令個人の自由を得なくとも、又個人が或意味の拘束を受けても、さう云ふ事は已むを得ぬのである。大事を遂げる上に、小事を犧牲にするは、何うも仕方がない。それて今日までの女子と男子との關係は、すべての點に於て善いと云ふ譯てはない。男子が女子を扱ふ事は、相當の人間を扱ふやうな待遇をせぬければならず。即ち男女對等の扱ひをせぬければならぬのは、固より當然だ。又女子としても夫相當の學問をするが好い。社會も女子に必要なる教育を與へなげればならぬのだ。

▲然し舊日本の女子教育は何うだ。世間一種の教育家は、舊日本の女子は因循である、卑屈である、意氣地がないと貶すのてあるか、實に何と云ふ無禮な言だ。舊日本婦人の心掛けは實に立派なものてある（此時氏の双眼は、既に熱涙もて滿ちて居たが、更に一層の力を言語に籠められ）克己從順、誠意誠心に男子を補佐して居るこれが日本固有の婦德なのだ。所が今日の女子教育者は、女子の缺點を救はんとして却つて固有の特長まで毀損する傾きのあるのは、以つての外だ。從來の女子が慾を退け、苦を厭はず、献身的道德に涵養せられて、唯、一心に男子を補けんとする心掛けは、實に感謝して好いのだ。私は舊日本の女子に感謝する（言少しく濡ほひ、數々手巾もて涙を拭はれ）これあるが爲に日本の家庭は圓滿であるのだ。これあるが爲に男



加納治五郎氏の演說振（聲を放つて泣く）

子も内顧の憂がなく、活動が出來るのだ。これあるが爲に戰も強いのだ。然るに……世の輕薄な……論者は……唯文明の……皮相のみを觀て……（一語一涙言はんと欲して語塞り）日本の婦人は因循である。姑息である。意氣地がないと、口から出任せに惡評を下すのは、何たる無禮な言だ。私は日本婦人の爲めに大に辯護するのである。此美風は何處までも發達させなければならぬ。敎育の眞價は茲にあるのだ」と大聲に喝破し、渾身の力を右腕に籠めて、續けさまに卓を打ち、感極り聲を放つて涕泣された時は、聽衆異口同音に『同感々々』と叫んで、同情の拍手は急霰の如くに起つた。

▲演壇の傍なる當日の來賓下田次郎、釋宗演、新渡戸稻造の諸氏を始め、同會長大谷嘉兵衛知事周布公平の兩君も、皆、氏の演說に感じて、身動きもせず謹聽して居られたが、就中溫厚着實、敎育には熱心なりと稱せらるゝ大谷氏の如きは、最も感動された樣子に見受けた。

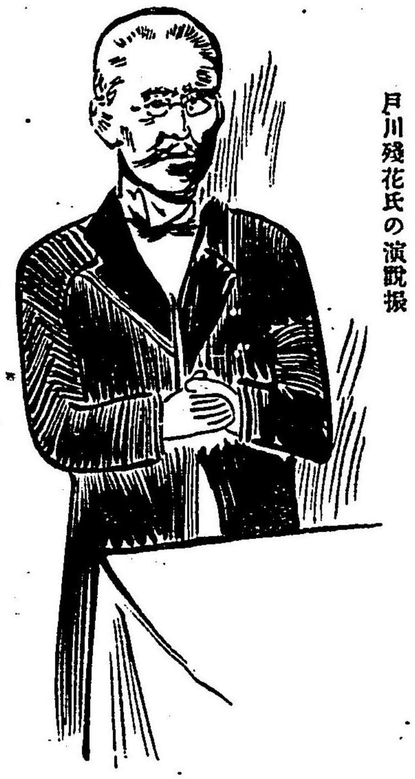
▲氏は高師の生徒や、宏文學院其他の學生には、大に人望あり。先生は將に將たる人で、確かにペイ〳〵ではないと心服して居る。氏は柔道と演說との關係に就いて、嘗て余に語られた事もあるが、餘り長くなるから此位にして置く。

（三九）戸川殘花氏

題の長い人――手付が妙だ――顏面が絶江戸ッ子型――絶江戸ッ子
辯――ベランメーから遊ばせ言葉――言廻しが巧みだ――氏と奧村
八百子女史――山家集の講義――ユーモアあり、皮肉あり――品の好い說敎

▲殘花戸川安宅氏の演說振は、其風采態度が如何にも奇拔だ。頭が前が高く後がガクリと下り、顏が長く、顎は頗る長い。尤も古今東西を通じて、名家で顎の長い人は隨分ある。氏の敬慕せらるゝ西行法師も、伊太利のダンテ、鎌倉の歌人阿佛尼なども、非常に顎が長かつたさうだ。近頃では、故成島柳北先生は名代の馬面顎長で、故福地櫻痴居士故市川團十郎も、隨分長かつた。それから德川慶喜公、矢野文雄氏大槻如電氏、岡野知十氏なども長い方だ。喜知六と云ふ俳優も恐ろしく長い。氏は此

長い顎を前へッン出し、顎で物を言ふ。顎で指圖すると云ふと、恐ろしく高慢に聽えるが、然し妻君などを呼ぶに『オイ何や』と顎を出して、優しく云ふと、何となく情が籠る。



戸川殘花氏の演戯振

▲氏の手付も妙だ。演壇に登つても、手を揮つたり、卓を叩いたりする事は一切ない。右の手を握り、左の手でこれを蔽ふやうな形容(圖の如く)をされる。又は左右十指を、盡く組合はして居らるゝ時もある。それて演說の初から終までヂッとして神妙に胸へ當てた儘だから、遠くから見ると、全で拜んて居るかの如くに見える。

▲氏の顏面が純江戸ッ子型てあると同時に、又純江戸ッ子辯てあるから、非常に言語に富んて居る。ベランメーから遊ばせ語まて、嚙み別け呑迄んて居らるゝので、言廻しが誠に巧みだ。坊間傳ふる所に依れば、氏が女子大學の創立當初、寄附金勸誘に廻らるゝに、ドッカと應接室へ腰を下し、穩かな粘氣ある辯で、根氣强く說かるゝので、大低は往生して多少の寄附をする。流石の大隈伯も、氏の根氣に負けて其勸誘に應じた。此點は故奥村八百子女史と劣けず優らずてあると云ふ者もある。說の信僞は余の保證する限ではないが。兎に角其辯舌に、一種拔く可らざる根氣のあるのは事實だ。

▲氏は西行の爲人を慕はれ、『山家集』は最も得意とせらるゝ所で、其講義を聽時は眼前西行の髣髴たるを覺ゆる程てあると云ふ評判だ。其他頗る多趣味の人で、何事にも凝性てある。基督敎は氏の面より信仰せらるゝ所だが、近來は又禪學を研究され、其他俳句、謠曲、俗曲、碁、釣、茶道、骨董癖など、なか〳〵趣味が廣い。例の元祿會も、氏の發起されたのてあるが、從つて其辯舌も、又多方面に涉つて、其中自からユーモアあり、皮肉あり、精彩あり、相錯綜して言廻しの巧妙なる所は、

純江戸子辯てなければ、到底ア、旨く往くものでない。以前盛んに說敎をされた時分も、誠に品の好い口調であつたと云ふ事である。

（四〇）加藤咄堂氏

（上）

佛敎文士中の辯士――前座の加藤咄堂――助け船――晩酌に二升を傾く――咄堂能く鏡を欲す――加藤孝子――犬の食道樂

▲現代佛敎文士中に於て、能く讀み、能く記し、能く辯ずる事は、氏を推して第一とせざるを得ないのである。氏の演說は、態度、音聲、調子共、三拍子揃つて確かに旨い所がある。演說の內容は、いつも人格問題でなければ、傳道的又は心の研究と云つたやうな事を重に說かれる。一體に語調が平易で、偶には理窟つぽい事も言はれるが、それがさうでなく聽える。理窟つぽい事までが、至つて平易に聽える所が、氏の辯舌の妙所なのだ。

▲明治廿四五年、余がまだ靜岡で、速記術の傳習をして居つた頃であつたが。大內青巒居士が、佛敎徒の招聘を受けて、數々來岡され、盛んに演說をされる時分に、

氏は年齡漸く二十前後。いつも前座を勤められ、得意の能辯を揮はれて居た。余も速記の依頼を受け、一二名の門人を引連れて出掛けて往つたが、大內先生は兼て聽ゆる辯者だから、自身で速記するが、隨行の加藤と云ふは、年も若し大した辯舌でもあるまいと、卒業した許りの門人に一任して、君、前座の加藤つて人のを速記てくれと、高を括つて居た所が。何うして〳〵、イザ登壇して饒舌らるゝ所を聽くと、なか〳〵の能辯家で、引受けた速記者は青くなつて、『助け船え〳〵、とても私には速記ませんから、早く助勢して下さい』と言つた位、既に其頃から立派な辯舌者であつたのだ。

▲氏の口調は雜と斯うである。譬へば『人格論』と云ふ演題ならば『諸君、私は人格論と云ふ御話をします。人格、人格でありますが』と二三回人格を繰返す『此頃人格と云ふ事が流行りまして、人格を良くしなければならぬ、人格を改善しなければならぬ。人格を養成しなければならぬと云ふ問題か起りましたと云ふ事は、實に今日の日本に於て幸なることであるのであります。

▲それで人格論と云ふ題を出して置きましたが、此人格と云ふやつ、そんな六かしい言葉を廢めてしまつて、人間――分り易く人間の資格と云つた方が好い。所で此人間と云ふやつ、こいつが分つたやうで分らぬ。人間とはどんな物、人間とは何ぞや、そんな物が人間であると云ふ事が分つて居らぬ』と云つたやうな風だ。

▲氏の資性淡泊にして、世の毀譽褒貶利慾榮達に關心せざるの風がある。從つて演說も磊落放膽の所があるので、基督教の松村氏同樣、多く青年の崇拜者を有つて居る所以であるのだ。聞說く氏の父君は、非常の大酒家で、一寸晩酌に二升を傾けらるゝので、酒の爲めに費す錢は大したものださうだが。氏は少しも厭な顏をせず、一意奉養を勉められ、能く一管の筆と一枚の舌とに依つて、夫等の費用を產出されるので、世間から『咄堂は能く錢を欲する人なり』などゝ惡口を言はるゝのも、全く是等の原因があるからである。故島田藩根翁は常に氏を評して『加藤孝子』と尊敬されて居つた。又氏は至つて食道樂で、能く錢を欲する代りに又能く之れを散じ、演說の前には散々腹詰込んで、壇に登らるゝのださうで、これも松村氏が演說の前にウンと洋食を食ふのと能く似て居る。

（下）

▲氏の態度には、一種言ふに言はれぬ好い所がある。それに氏の口調がいつもキツパリと『すべきものてあります』『すべからざるものてある』と斷定して言ふ。『すべきものてありませう』『さうだらうと思ひます』などと、宛曲に廻り遠く言はぬ。すべてハキ〳〵述べらるるが、其の場合に少しく首を左に傾け、左手を堅く握り、右手の食指を枪の如く伸して、唇の所へヒヨイと持つて來て、其の途端に、頰を充分に膨らし、髭をムク〳〵と動かし、やがて思切つた大聲で『斯う云ふ結果になるのてある』と、シユーツと手を下す（圖の如く）時に、指の先きに非常に力が入る。

▲一體氏は痩つこけて居るから、指なども、細い〳〵トウスミ蜻蛉のやうだが、細いだけに餘計に力が入るやうに見える。又手を使ふ呼吸が、何の事はない。劍術の

目ふに言はれぬ好い所がある――目の先きに力が這入る――大向からヤンヤの掛聲――チヨボクレ的――ヤートコセエヨーイヤナ

達人が、青眼に構え、敵の隙を見て、ヤッと云ふ掛聲諸共、スパリと空竹割にするやうな工合だ。然も其髭の動く時、指の唇へ接して、パタと睨む時などが、ちよつと團洲張と云つたやうな調子で、青年の聽衆をウナらせる所なのだ。

加藤咄堂氏の演説振

▲氏は芝居好き、淨瑠璃好き、小説好き

て、芝居と云ふ芝居は、皆觀て居る。淨瑠璃は自身で少しは唸る。小説は舊新を厭はず、有ゆるものを貪讀する。從つて演説中に、科白や小説の文句が能く這入る、勸進帳、忠臣藏、又は八犬傳などの、長い文句を記憶して居て、臆面もなくスラ〳〵と述立てる。スルと大向ふからヤンヤの聲が掛る。先生得意になつて、少し身を反らしながら、ニヤリ〳〵と笑ふ『立てば芍藥座はれば牡丹、歩るく姿が百合の花』『花の顏月の眉……』此二つは能く聽かせられるのである。咄堂咄にあらず、眞に能辯の士であるのだ。

▲然し餘りに、巧みなので、何うかすると、チョボクレ的になる。態度も身振手振が烈しいので、踊つてるやうに見える。演説中に『人は慾が有り過ぎては不可ぬ、古歌に、上見れば及ばぬことの多ければ笠着て暮せ已が心に』と、ヒョイと頭へ手をやつて、笠を被る眞似をして、又胸をチョイと押える。又『下見れば及ばぬことの多ければ上見て通れ兩國の橋』と言つては、手を額にし、屈んで下を覗く眞似をし、又グッと上を見る樣子が、まるで『ヤートコセエーヨーンイヤナー』と云ひさうな風だ。要するに莊重を缺き、無頓着に過ぎる慊らひかある。然し又大家振らず、先生振らざる所が氏の長所なのださうて、假令俳人に侮らるゝ所があつても、先輩

に愛せられ、後進に推され、同人に親まるゝのは、全く自重自尊の風がないからである。

（四一）高田早苗氏

（上）

アナ恐ろしきかな――大雨で骨まで濡れさうた――軍官法官警察官其他奏任以下の事務官は政黨の爭に關せざるを以て令德とする所以を論ず

▲明治十九年ノルマントン號事件の時に、溺死者追悼及び義捐金募集の爲め、淺草の井生村樓で演說會を開いた事がある。博士は當時大學を出られた許りて、盛んに各所で、悲歌慷慨的口調の演說して、賣出さうと云ふ際であつたが、今と違つてまだ〳〵口調に生硬所があり、全て演說遣ひの口上であつた。博士の其時の口調が、又特別に奇拔たつたので、余はいまだに記憶して居る。

▲それは斯う云ふのだ。博士は壇に上らるゝや、非常に氣取つた態度で『アナ恐ろしきかな、アナ恐ろしきかな、アナ恐ろしきかな、心、これを思ふに堪へず、口、これを言ふに忍びずとは、セクスピアの曾て言つた言である。諸君、此度のノルマントン號事件は、何と悲絕慘絕の限りではありませんか……』と劈頭先づ『アナ恐ろしきかな』を三度繰返した。

▲余は某先輩速記者と氏の演說を速記し、やがて會も終つて兩人歸途に就いたが、途中で俄かの夕立、非常なドシヤ降りで、骨までも濡れるかと思ふ程の大雨。雷鳴さへ加はつて、天地晦冥、一寸先きも見えぬ位になつたので、ソレ馳出せと。兩人跣足になつて、息セキ切つて、馳けて馳けて、淺草橋まで來て、漸く二人乘の俥を見付けて、それへ乘り、ホッと息を吐きながら、兩人顏見合せて『アナ恐ろしきかな、アナ恐ろしきかな』

▲イヤ其時分は今から見ると、演說と云ふ事が非常に流行つて、隨分妙な奇拔な演說をする人があつた。矢野文雄氏はいつも演題の長いので評判だつた。余が今でも記憶して居るのは、木挽町の厚生館で『軍官法官警察官其他奏任以下の事務官は政黨の爭ひに關せざるを以つて令德とする所以を論ず』『イヤ長い〳〵演題で、軍

官とは陸海軍人、法官は裁判官、警察官は警部、巡査、奏任以下とは所謂判任——腰辨當連中でありますと、一々演題の講釋をされてから本文に入る。たしか演題の講釋だけに、三四十分は費したと思つて居るが。何しろ奇拔な演說振であつた。

▲近來では理學博士寺尾壽氏、理學博士田中館愛氏抔が、なか〳〵奇拔な演說をされる。壽博士の口調は雜と斯うだ『諸君、我々は今何處に居るかと斯う云ふ問題を提出しましたならば、神田に居ると答へるでありませう。神田は何處だと問ふたら東京の內と答へるでありませう。東京は何處だと問ふたら日本の內と答へるでありませう、日本は何處だと問ふたら、車夫馬丁位の無敎育者では答が出來ますまい少なくとも中學の生徒位になつたらば、日本は亞細亞の內と答へるでありませう。亞細亞は何處だと問ふたなら、東半球の中と答へるでありませう。東半球は何處だと問ふたら、地球の內と答へるでありませう』と言ふやうな面白い演說をされる。イヤ高田博士の『アナ恐ろしきかな』で度膽を拔かれて、ツイ話が他へ外れた。

（中）

演說が說明的、座談的——猛虎蛇の演說——氏の三癖——唾さうな眼付——貪乏ユスリーフロツコートを無暗に捻くる——政治二分學者八分演壇が邪魔になる——演說の前は氣分が悪い

▲博士の辯舌は說明的、座談的であるから、辯難攻擊長廣舌を揮ふ場合には成功せぬ。犬養、尾崎、又は井角氏の如く皮肉に往く事は出來ぬ。けれども如何にも明快であり、直截であり、英文學が土臺て、それを日本化してやらるゝので、頗る趣味に富み上品な演說である。政談演說にも向けば、學校の講義にも向く、頗る調法ではあるが、其代り政談演說が講義風になり、講義が政談演說になる事もある。又一席の演說でも、初めは政談演說で、中頃が學者風になり、終りが座談的になる。即ち口調が猿虎蛇になる事もあるので、之れを稱して鵺的演說だと戲言を云ふものもある。

▲博士は男も美く、態度も悠揚として迫らず、謹嚴熱誠、言々肺腑より出て、何處までも學者風である。と云ふと少しも癖がないやうだが、所が大有りなのだ。博士

の三癖とも云ふべきは壇上で、始終眠さうな眼付をして居らるゝのと、時々貧乏ユスリをするのと、常に兩手でフロックコートの襟やらボタンやらを捻くり廻はして居らるのである。又數年前迄は、態度にも口調にも政治家らしい所もあつたが、今では政治二分、學者八分位の割合になつたやうだ。

▲それに博士はいつも演壇の傍に出て居られる。これは博士の談に依ると『何うも演壇が前にあると邪魔になつて、聽衆に接近しないやうな氣がして、演説が遣悪い演壇の右か左の傍へ出て、聽衆の目前に立つてやると、何となく聽衆と親むやうな氣がして、スラ〳〵スラ〳〵と言語が出て來る』と言はれて居る。又、右の手はなか〳〵能く働かせるので、意氣軒昂、熱心に演説さるゝ場合はいつも、右手を高く上げられて、言語に非常に力が籠るのである。

▲又妙な事には、博士は演説をする前になると、兎角氣分が悪るくなるさうで、イザ演壇へ登らうと云ふ間際までは、何となく氣分が悪くて、勇氣がないさうだが、壇に上つて、思ふ存分饒舌つて了ふと、實に日本晴のしたやうな、サッパリとした氣持になるゝさうだ。尤も島田三郎氏も嘗て余に語られたには『變な話だが、何うも演説をする前は、氣が滯いて堪らぬ。自分で氣を引立てやうとしても、兎角沈み勝て困るが、イザ壇に上つて了へば、ガラリと氣分が復る』と云はれたが、西洋にもさういふ例は隨分あるさうだ。世に能辯をもつて聞ゆる高田、島田二氏が、演説の前に氣分の悪るくなると云ふのは、ちよつと不思議のやうだが、矢張大家は大家だけに苦心の存ずる所があると見える。

（下）

樂屋へ擔込まれる——山門の仁王樣——妨害壯士の鎮撫——十六歳の初陣——敵なからも天晴の若武者——軍扇を投與へる程の雅量——二十五年間背水の陣を張つた——黒砂糖の味——月謝は貰つたよ

▲博士も流石に辯論界に長き經歴を有せらるゝだけに、面白い話が澤山ある。博士の談に『嘗て北陸地方へ遊説に往て、越中の或劇場で演説した時は、反對黨の壯士が聽衆の頭の上を飛んで來て、演壇へ馳上つて僕を撲らうとする。味方の者は撲らせまいと、僕を樂屋へ擔込む。少し鎮まると、又出て續きを演説する。又撲りに來

る。又樂屋へ擔込む。何でも一回の演説に三度、樂屋へ擔込まれた事がある。僕がウッカリ演説して居ると、突然大勢で擔込むんだから、一時は反對派に浚はれたのだと思つて驚いた。又魚津の或寺で演説した時は、演壇の前へ繩を網のやうに張て其中で演説する。反對派の壯士が草鞋を投る。其草鞋が何足も〳〵、網へ吊下つて全て山門の仁王樣のやうだつた。隨分演説では難義もしたが、又可笑い事もあつた。

▲所が博士は老巧な者で、演説妨害者を鎭撫する事には頗る妙を得て居られる。それは壇に上つて、先づ突然に奇句警語を放つて、聽衆の氣を呑んでしまふので、妨害者をして、グウの音も出す事の出來ぬやうにして了まふのだ。其一例としては、博士が松江市で政談演説をされた時も、反對黨の妨害が、頗る盛で、辯士が登壇しても、一語も發する事の出來ぬ程であつた。所が博士の番になつては、妨害益盛で、相變らず手を拍つやら、羽目板を叩くやら、大聲を發したりするので、無言の儘突立つて居られた、がやがて隙を見て『諸君。私は當松江藩の御祖先の御話をしますから、暫時靜かにして下さい』と言はれた。

▲封建の餘習が失せぬ我國の、而かも地方では舊藩主の話と云ふので、ちよつと聽く氣になつたものと見えて、さしもの妨害もハタと止んだので博士は仕澄たりと『諸君。私は我國の歷史を讀んで大坂陣に至る毎に、いつも當松江藩の御祖先が大坂合戰の時は

高田博士の演説振

先の武勇に感嘆せぬ事はありませぬ。御承知の如く當藩の御祖先が大坂合戰の時は

十六歳の初陣でありましたが、眞田の同勢へ馳け向つて、目覺しい働きをされたが其武者振が如何にも美事なので、眞田も敵ながら天晴の若武者よと、思はず軍扇を投與へたとあります。昔の武士は、敵ながらも其武勇に感ずれば、軍扇を投與る程の雅量があつた。諸君も當松江市民であられる以上は、定めて、此事は疾くに御存知であらう。然るに、反對黨の辯士が壇に登つて、未だ其演說をも聽かぬ先きから、妨害をすると云ふのは、如何にも卑怯ではないか。願はくは眞田が軍扇を投與へた雅量を以つて、暫時私の演說を清聽されん事を希望するのであります』とやつて退けられたので、敵も味方も非常に拍手喝采して、これが氣に入つたので、到頭反對派の壯士も、博士の演說だけは終まで謹聽したと云ふ話を傳聞して居る。

▲近來で博士の演說の上出來だつたのは、昨年五月横濱市敎育會のと、早稻田紀念會のとであつた。早稻田の時は演說の最末段『昔者は淮蔭侯韓信が一代に一度、背水の陣を張つたと云ふのでありますが、吾々早稻田の同志は、創立以來廿有五年間、絶えず背水の陣を張りつゝあるのであります。併ながら將來に於ても背水の陣を張るのが必しも能事ではない。將來は一厨基礎を固くすると云ふ必要を深く感じます』の一節が最も好かつたやうだ。

▲某政客の談に『高田君の近頃の演說は、全く學究臭くなつて、以前衆議院で星亨に退場を迫つた演說のやうに、水際立つた妙味が無くなつてしまつて、近頃は辯舌が甘たるくなつて、砂糖の利き過ぎた料理のやうで、而も黑砂糖の味だから驚く、然し早稻田のアノ廣庭で、アレ位明瞭に聲の徹つたのには敬服した。それに演說の組立も能く出來て居た。アノ時は大學の資金募集の御禮が重要部分であつたが、演壇を彼處此處、運動しつゝ饒舌つて居られた。隨分後で足勞た事だらう。然し何處までも學校の先生的演說で、アー月謝はもう貰つたよつてな工合だつた』と。ちよつとこれも面白い觀察だ。

（四二）北里柴三郎氏

醫家中の能辯者――熱海と肺病――メンミヤウチ――モミポシ、カリポシ――觀鏡と陰莖

▲博士も又醫界の能辯家と稱して可いので、スラッとした癖のない演說ではあるが唯、言語が少し明瞭を缺き、濁る所があると思ふ。速度は可なり早い方で、一分間四百音以上である。博士の演說には、比較的術語が少くなく、成るべく通俗に述べられるので、誠に速記者が助かるが、一體に專門的講話には、術語澤山で閉口する近來は速記界も大分發達して、教育や醫學方面に、ボッ〳〵專門速記者も出來たが何しろ專門的講話には、其素養のない速記者には、假令發音だけ速記でも、文字を當嵌める事が出來ぬ。

▲今でこそ海水浴が盛んで、夏になれば相房地方を始め、東海筋は勿論、奥州北海の邊阪まで、海邊と云ふ海邊は、病客と避暑客とを以て充滿されるやうになつたが明治廿六七年頃までも、肺病者の轉地療養は殆んど熱海と定まつて居て、熱海は肺病客を以て充滿され、それが爲め熱海の空氣を吸つても肺病になる。玉子にまでも肺結核菌が居る。健康者は熱海に近寄るべからずとまで評判を立てられ、これが爲めに、さしも繁昌し熱海も一時非常に寂れたので、これてはならぬと、當地の宿屋組合が博士を聘して、同地で衞生演說會を開らいた事がある。余も又招聘を受け速記の爲め出張した。

▲其時博士の演說中に『私が當地へ來て、各方面より研究調査して見たが、宿屋に於て病客其他器具類に對して相當の豫防設備をすれば、決して健康者に病毒の傳播する憂はないのみならず、衞生機關をして發達せしめたならば、此熱海をして、メンミヤウチたらしむる事が出來るのてある』と云ふ事があつた。さア此メンミヤウチが何うしても解らないっ發音だけは確かに速記してあるが、文字を、當嵌めるのか、沈思熟考したが何うしても解らぬ。憂念だが博士に『メンミヤウチとは何う書きますか』と質いた。聞いて見れば何てもないヤウチ〳〵と聽えるため、詰らぬ心配までせぬければならぬ。速記者程人の知らぬ

苦勞の多い職業はない。

▲嘗て横井農學博士の農業講話を速記した時も、モミボシ、カリボンと云ふ事があつた。モミボシとは採干か糅干は、カリボンとは刈干か假干か分らぬ事があつた。農業上の修養のないものが、農業の速記をするのだから、無理な所があるので、早く歐米の如く、各種專門の速記者を作らねばならぬ。

▲さうかと思ふと、分り切つた事も速記者が無學な爲めに、飛んだ滑稽が往々ある。今御笑らひ草にちよつと書くが、先頃桑原博士が或筋の依頼を受けて、國語問題の調査をやつた。其時某速記者を呼んで種々の議論や學說を口授した。其中に國語問題であるから度々『韻鏡』と云ふ言葉が出た。速記が出來上つて見ると豈計んや『韻鏡』の二字が悉く『陰莖』となつて居たので、博士は腹を抱えて轉がつて笑つたさうだ。

(四三) 高島平三郎氏

平易な口調——右の手で拜むやうな風似——老婆が賽錢を投げた——
——說教めいた演說——下らぬ事を下るやうにいふ

▲兒童心理學を以て有名なる氏の演說は、誠に巧妙なものだと評して可いと思ふ。其の口調が頗る平易で、高尙なる心理學を、婦人兒童にも能く了解するやうに說明され、少し長くなつて、聽衆に飽きが來たなと思ふと、ガラリ口調を變へて、稽滑などを交ぜて、人を笑はせる。夫故いくら長時間の演說でも、倦怠を來たす事がなく、又場所に依り、聽衆の種類に依つて、演方を變へらるゝ所は、それはなか〳〵巧みなもので、所謂『人を見て法を說け』の呼吸を會得して居らるゝやうだ。

▲氏の風采も又立派で、丈も高し、房々した鬚髯の工合などが、如何にも堂々として、政治家然とした所がある。去年宮崎縣の夏期講習會へ出張された時などは、土地の新聞に『高島氏の風采態度は、確かに總理大臣の價値がある』とまで書かれた位だ。

▲然し氏の演説中の態度には一寸可笑しい所がある。いつも左の手を握つて腰へ突き、右の手で禮拜するやうな風をされるので（圖の如く）思はず南無阿彌陀佛と唱ひたくなる。又時に依ると高く額の邊まで擧げらるる事がある。全て軍人か巡査が敬禮するやうな姿勢であるのだ。

高島氏の演説振

▲氏は早く嚴父を喪はれ、十四歳の時小學の助教となり、具さに辛酸を嘗められ、刻苦精勵、人世の酸も甘いも御存知だから、言語にツヤがなく、情の籠つた演説をされる。京都で演説された時などは、本願寺の坊さんが御説教をする程の人氣を集められたさうだ。北海道の婦人會で演説された時には、座中の老婆が、氏の演説に感じて御賽錢を投げたと云ふ話である。兎角宗教めいた演説振であるのだ。

▲氏の長所は下らぬ事までも下るやうに言うので、詰らぬ事までも尤らしく演説されるから、俗受もなかなか宜い。それに演説が至つて眞面目でジミだから、何となしに奥床しく見えるので、氏に執つて非常に得な所がある。

▲氏の新著『心理學』は、有志の醫師達が集つて聽聞した講義の筆記であるが、平易簡明で能く解ると、大層評判が好い。學者間でも隨分譽めて居る人もある。成女學校の宮田氏などは『僕は高島君と一所に講演するのも可いが、まるで高島君の旨いのを證明に出るやうなもので、自分のが格別不味く聽えるやうな氣がするから、もう一所に饒舌る事は御免を蒙むりたい』などゝ串戲を言つて居られた。

（四四）松村介石氏

講談師が演説の御師匠――氏の演説論――第一に聲――土州薩州の腹から出る聲――第二に材料――第三に精神――説教に祈禱――演説と洋食――演説と深呼吸――説教と人格

（上）

▲氏は演説と云ふ事に就いては隨分苦心練習をされたものだ。十數年前出京當時はスポンションのコメルチックなどて、頻りに態度や呼吸の研究をされ、又寄席へ往つて講談を聽き、始めから終まて詳しく手帳へ寫取り、此處は口調を早くした。此處は緩やかに言つた。此處は最も急調てあつた。此處は輕く饒舌つた。此所は最も略したなどと、一々符牒を附けて置いて。家へ歸つてからこれを練習する。釋師の中ても、一山、文庫（先代）貞吉（先々代）如燕（先代）を好まれ、態々家へ招いて、講釋をさしては、これを聽いて、演説の稽古をする程の熱心てあつた。

▲氏が嘗て余に語られた演説論と云ふものがある。夫は斯うてある『演説には、第一に聲だ。これは性來は無論だが、無茶苦茶に大きな聲を出すのは、釣鐘を突くやうて頓と不可ぬものだ。けれど小さくては猶更駄目だし、キイ〳〵聲ても見つともない。先づ土佐や薩人のやうに、腹から出る聲と、細かな耳の底まても徹るやうな、江戸子辯とを交えたら、屹度好いものが出來る。又平生から滋養物を食つて、體格を養つて置かなけりれやならぬ。夫故大演説をする前には、西洋料理をウンと食へ。日本の飯は不可ぬ。何てもウンと滋養物を食つてかゝるが一番だと、自分はさう思つて居る。

▲第二に材料だ。何ても澤山の材料を集めて、其内一つこれを他の頭へ入れやうと思つてかゝる、澤山は不可ぬ。何も是も盡く他の頭ハ注ぎ込まうとしてはならぬ。傳記、歴史、其他の材料を盡く譯もなく列べ立てただけては、聽衆は何を聽いて歸つたか、唯、面白かつたと云ふだけの話で、何の得る所もない事になる。故に材料の撰擇も大切たが、其中何かこれを一つ、聽衆の頭へ注込ふとしなければならぬ。

▲第三に精神だな。所謂腹だ。熱火が燃えて、激して、滿腔の精神が沸々と煮上るやうな場合には、何樣な平凡な者ても大演説が出來る。これは演説許りではない

文章も左樣だ。演劇でも左樣だ。講談でも左樣だ。相撲も左樣だ。氣の向かない時は、雄辯家でも詰らぬ話をする事がある。假令海老名でも植村でも、氣の向かぬ時の演說は聽かれたものぢやない。僕は說敎をする前には、必らず祈禱をする。それは神の力を得ると云ふ事も一つあるが、又一つには、精神をそれへ集注するのだ、說敎でも演說でもしやうと思ふには、飯を食つて居ても、運動をして居ても、仕事をして居るうちでも、三日は其方へ計り心を向けて、其當日は成るべく早く起きて深呼吸をして、洋食をウンと食つて、さうして壇に上れば大抵出來不出來はない。

▲講義と演說とは、これは呼吸が違ふ。講義の方は諄々と、御尤でござると云つたやうな調子で、抑揚もなければ波瀾もなく、スラ〳〵と言つてしまへば可い。此方か學者らしく見える。確實な事も言へる。今は斯う云ふ風の演說が流行して居るがさう云ふ人には、大演說は決して遣り遂せぬ。詰り情熱がない。活氣もない。唯、頭許りて遣る。智識許りでやるのだから、人の意志を根底から動かす事は出來ぬ。寧ろ書を讀むに如かずだ。唯、大人振つて、學者振つて、段々と活氣がなくなつてまるで文章を讀むやうなものは、演說でも說敎でも何でもない。頓と駄目だ。

▲さう云ふ演說は一番遣り易いので、統計を擧げる、歷史を擧げる、書物を調べさへすれば、雜作なく出來るのだ。所がさう云ふ風の演說をしても、聽衆の來ると云ふのは、詰り一つは演說者の人格を見に來るのだ。說を聽くのぢやない。海老名でも植村でも、外の人がア、云ふ風の演說をしたら、誰も聽衆はない。海老名が遣り植村が遣るから來るのだ。全く人格問題だ。けれども眞に演說と云ふ上から云へば、それぢや不可ぬ。演說は演說らしく遣らねばいかぬと思ふ。

(中)

學生に好かれる——事實の應用が旨い——松村流の解釋——松村の張扇——聽衆又二重の苦み——俗に碎けて往く——天空快濶——

▲氏の演說は、始より終まで、條理整然と云ふ譯には往かぬ。今ナポレオンの話をして居るかと思ふと、中途から急にビスマークの事に移る。話がヒョイ〳〵變つて行く。尤もこれが氏の長所であるさうて、秩序は立たぬか知らぬが、然し此方が自から活氣がある。又、氏の言語が壯快で、ちょつと好い所があるので、青年者流—

――重に中學時代の書生に悅ばれ、學生中には、なか〳〵崇拜者があるとの事だ。

▲然し其演說を聽いて見るに、餘り深遠なる思想は何うかと思ふ。唯、多く書を讀み、又たは見聞したる事實を取つて、それを相錯綜して說くので、詰り應用が旨いのである。何うも頭から割出すと云ふ事は、即ちOriginalityを聽かすのは、餘り長所ではないらしい。それだから氏の演說には、カーライルが出る。王陽明が出る。諸葛孔明が出る。勝安房が出る。横井小楠が出る。西郷南洲が出る。それから書物では、聖書は勿論、論語、孟子から莊子なども能く出る。其の莊子も時としては、獨自一己の松村流の解釋があるやうだ。

▲それて氏の演說振は何うしても講釋風だ。だから『松村の張扇』などと京童は云ふ。詰り通常の敎會の說敎が、一體に難かし過ぎて、矢鱈と西洋人の名を擔出し、又は主觀的、客觀的、抽象、具體など云ふ語を用ゐて、難かしい言葉で話すから、聽衆に二重の苦しみをさせる。何うしても俗に碎けて往かなければならぬ、極く通俗的に解り易くしやうといふには、時に講釋風になるのは已むを得ぬ。

▲氏の今の立場は、其の信仰が新派か、舊派か、殆んど何れにあるか分らぬ位である。氏は元來Presbyterianの人であつたが、一時は組合派の仲間入をした。今日では一寸別動隊として働らかれて居るらしい。頼みに來れば、新敎でも、舊敎でも、ユニテリヤンでも決して頓着せず、ドシ〳〵往つて說敎する。頗る天空快濶な所がある。要するに、速記者側から言へば、氏の演說は速記し惡くいけれども、聽いて居ては、實に非常な興味を感ずるのである。

（下）

全て電流のやうだ――豪壯な態度――何うだ膝組て話さうか――音聲がしや嗄れて居る――聽衆を眼八分に見る

▲氏の演說は、全て電流のやうて、一方に電流を集注して、非常に豪壯な態度をなし、眼を張り、拳を固めて、大聲疾呼するかと思ふと、又忽ち顏色を和らげ、聲を潛め、或は滑稽を交へ『何うだ、膝組て話さうではないか』と云つたやうな。如何にも平民的な所がある。それが氏の演說の美い所、又人氣を取る所であるのだ。

▲先づ氏の演説は、何方かと云へば滑稽的で、笑ひながら眞理を語らうてはないかと云ふ、其調子が寧ろ耶蘇教よりも佛教に近いやうだ。氏の演説を分析すると。耶蘇二、佛教四、講釋四である。

松村介石氏の演説振

ちよつと見ると豪傑らしく、又磊落な樣子もあるが、一方には非常な神經質で、微細な所まで能く氣が附き、能く分る人である。所謂巍枝大葉の方ではない。概して氏の演説は上手の方だけれど、其音聲がしゃ嗄て居るので、大會堂では隅から隅まで徹らぬ事があるので、自分もこれには弱つて居らるゝさうだ。それでも聽衆に、非常に興味を感ぜしむるのは、餘程演説に鍛錬した所がなければ、ア、旨く往くものではない。

▲余は氏の態狀に『聽衆を眼八分に見て掛る風がある』と思ふ。又上を睨む癖がある。それに初めは左手を腰にし、右手を垂れて、イザと云ふ場合になると、自由自在にこれを働らかせる覺悟をして居る。又演説が佳境に進み意氣頗る揚ると、ひよいと髭を捻る癖がある。氏は首が非常に太いので、洋服を着けるとカラが氣になつて演説が出來ぬと云ふので、近來は和服許りだ。

▲氏が嘗て余に語られたには『僕は講談が好きて、寄席へ手帳を持つて書きに往くが、始めより終りまで書けるのは、下手な講談で、上手なものになると、ツイ筆を止めて聽く方へ氣を取られて了まふ。夫故速記の出來るやうな演説は、眞の演説ではない』と、是に由つて見ても、氏の演説は講釋師然たる所があると云ふのも、道

理ある事である。

（四五）近角常觀師

熱心の二字――氏と聖德太子――ポチ〳〵口調――聽衆は壓せらる
他の辯士は迷惑する――も少し簡單――近角流の談話體――精神主義と內容の實驗――法衣に重きを置かぬ――

（上）

▲師の說敎は、一言にして蔽へば、『熱心』の二字に歸するのである。眞宗では聖德太子を尊奉して、和國の釋尊とまで云ふのだから、苟も淨土眞宗の僧侶で、太子を擔ぎ廻る事は、何も不思議はないのだが、師は特別に太子崇拜で、唯々太子の人格を慕はるゝ所から、其說敎にはいつも敎行信證や、御和讃の主意を敷衍され、近來は又自然法爾の章が能く出る。詰り氏の說敎は、聖德太子が根本となつて居るのだから、人に依ると、『近角はいつも同じ事許り說敎して居る』と言ふ者もある。

▲師は辯舌は、巧くもなく、又拙くもないのだが。唯、如何にも力强い所があり。師が興に乘じて滿腔の熱誠の披瀝て、太子なり、親鸞なりの敎旨を、其儘他の頭腦に住込まんと、眼を閉ぢ、珠數を爪繰つて、一心に演述せらるゝの時は、全く親鸞其人の前に敎を受くるかの如く、崇高尊信の感に打たれて、唯、難有くて〳〵念佛稱名を隨喜渴仰の念に堪へぬと、或一部からは非常に崇拜されて居る。けれど余の見る所では、師の說敎は少し長過ぎる、感興湧來ると、例のポチ〳〵口調で、一時間も二時間も、立續けに饒舌らるゝので其爲め聽衆も多少倦いて來る。長いから妙味も出て來るのだらうが、今少し簡單ならば、尙一層美いであらうと思ふ。

近角常觀氏演說振

▲師は明治三十五年、歐洲より歸朝後、無重壽經の『醫加大海一人升量經歷劫數尙可窮底得其妙寶人有至心精進求道不安會正尅果何願不得』の文より取つて、今の求

道學舍を興され、毎日曜に此舍で説教される。八疊三間の襖を拂つて會場とし、正面に卓を据え、清澤師の寫眞を掲げられてある下に立つて、自己の靈感をポチポチと述べられるので、其口調が、純粹の説教風でもなければ、無論演説的でもない。一種近角流の談話體である。清澤師は所謂精神主義で、常に綿服を着け、一面からは消極主義とか何とか評はれては居たが、又一面には明治の親鸞とまで尊崇され、其口調にも態度にも、確かに一つの特色はあつた。師は其後を受けて立たれたので、重に内容の實驗を以て標榜され、常に羽織袴又は洋服を着けられ、滅多に衣を纏まれない、詰り法衣なるものに左程重さを置かれぬらしい。

（下）

眞諦と世諦――一種の道氣横はる――信仰の告白――師と清澤滿之
師――チクリ〳〵と刺す所がある――師の慈女房――菩薩の權現――
――煩悶と不平――感謝と喜悦――師と宗教法案

▲日本に於ける他力信仰の歴史的系統は、聖德太子より所謂眞宗七高僧を經て、親鸞に至るのは言ふ迄もないのだが、師の演説中に斯う云ふ事がある『聖德太子と云ふ方は、眞諦の精神を以て世諦を經營されたので、此點より觀察すると、聖德太子～親鸞上人との間に、教理以外人格的意味に於て相繼承して居る所がある。私は敢て七高僧の傳燈を否定する譯ではないが、一面に於て太子と上人との間に、何等かの筋がある。人格的連鎖があると思ふ』と説かれて居る。

▲師の顔面は粗野朴直の内に、一種の道氣が横つて居て、確かに師の性行が發現されてある。而かも其皺枯た聲までが、人の信仰を深からしむるに足るのである。其上科學的頭腦を以つて宗教諸問題を解決するのは、流石赤門出だけに師の長所である。故に男女となく教育ある中學以上の學生に崇拜者が多い。師の第一求道學舍（本郷）第二求道學舍（九段）第三求道學舍（日本橋）での説教、其他すべて説教の道り工合が、自己信念の發動を、其儘他の頭腦に注入せんとせらるゝらしいから、寧ろ演説若くは説教と云んよりは、信仰の告白と云つた方が宜からう。而して聖德太子と親鸞上人は附物で、いつも此二つの出ない事はない。

▲故清澤滿之師の口調は、春風駘蕩、肌觸好く、知らず識らず他を感化する力があ

うた。師の口調は諄々と説く中にも、一寸俊烈な所がある。然し其意氣の熾なるのと、熱心の點に於ては、清澤師を凌ぐ所がある。師は宗教上の熱心許りではない。何事にも熱心であるのだ。師の令閨は將師八十島氏の令孃で、即ち師の戀女房であるが、まだお茶の水高等女學校に居られた頃から、才色共に秀で、諸方より嫁に呉れ、婿に往からと、一人娘に婿八人の覬があつた。師も又其才色に憧憬れた一人で、日々お茶の水を何返となく徘徊する程の御熱心で、遂にマンマと令閨に貰受けられ『菩薩の權現』とまで愛されて琴瑟相和し、人をして『關關雎鳩在于求道愛』と言はしむる程である。妙な事には師の令閨を得られざる以前は、其口調に煩悶不平らしい傾きがあつたが、今ではガラリと變つて、感謝と喜悅とに滿ちた口調となつた。師は大學卒業後、教誨師問題や宗教法案で、佛教青年會を率ゐて、盛んに活動されたのは、誠に素晴らしかつた。假令大學院を放逐されて、石川舜台師に知られて、一萬五千金を懷にして洋行し、歸朝後着々名聲を博し、眞に二十世紀的佛教徒の木鐸となつて、大に斯教の爲めに盡されんとするのは、誠に多すとべき事である。氏や幸に自重加算せられん事を祈るのである。

(四六) 重野安繹氏

(上)

兼ての宿約——童顔鶴髮の兩翁——能狂言を觀るやうだ——隱居弊害論——穩雅精練——てくろ——ぢやに依つて

▲一世の大儒として、世の尊崇を受けらるゝ博士は、昨夏、八十一歳の老軀を提げて、東京學士院を代表し、菊地大麓氏と共に、遠く墺の維納に航し、內外人の尊敬を博して歸朝され、矍鑠壯者を凌ぎ、盛んに各所で、洋行中の所感を演說されて居るが、博士が今回の渡歐は兼ての宿約を果されたのである。

▲それは明治三十二年に、博士の知人門生等が集つて、博士の古稀の壽筵を紅葉館に開いた事がある。其時博士は能舞臺の上に起立して、下の如き演說をされた『私の爲めに今日諸君が斯く盛宴を張られたのは、誠に感謝する次第である。然し私は當年七十二歳（英照皇太后崩御の爲め延期されたので、博士は此時七十二歳であつた）で日本の習慣で云へば疾に隱居する歳である。けれども私は平生の持論として、

隱居などは思ひも寄らぬ。私は今從事しつゝある一つの仕事がある（博士は當時國史總覽の編纂をされて居つた）これが先づ十年も經ては一段落を告げるから、即ち十年の後には、一度洋行をする。歐洲を巡覽して歸途清國へ廻はる。即ち十年の後には、必ず洋行する考である』と公言された其宿約を、今回果されたのださうだ。而も其席上、博士の爲めに開會の挨拶を述べられたのは、これも當代の宿儒、南摩綱紀氏で、氏も齡七十を過ぎ、博士と俱に童顏鶴髮の翁が相並んで、舞臺に立たれた光景は、全で何かの能狂言を觀るやうな感がした。

▲博士の持論と云ふのは、『兎角日本人は早く隱居をしたがる癖がある。尤も隱居と云ふ制は、日本許りて、西洋にも支那にも、其樣な制度はない。私は一生隱居をせぬ積りぢやが、それには平生から餘程衞生に心掛けて、身體の健康を圖るは勿論、精神をして常に强壯ならしめなければならぬ。それで私は三年なら三年、十年なら十年と、一つ目安を置き、目的を定めて仕事をする。年八十になれば、先づ國史總覽の神代の卷だけの編纂が出來る筈だから、それを一段落として洋行をして、歸朝後、神武天皇より平安朝までを三年、平安朝より鎌倉賴朝の興起までを三年、鎌倉より王政維新迄を三年と極めて、合計九年――雜と十年掛つて、九十歲の時に全部完成する見込ぢや。大隈伯は百廿五歲まで生くると言はれて居るが、私は少くとも百歲までは生くる積りて、衞生には非常に心を用ゐて居り、始終年限を定め、目安を立てゝ、仕事をするやうにして居るから、自分では左程老衰せぬ積りぢや。

▲西洋の學者を見ると、何時までも氣力が衰へぬではないか、支那人も矢張左樣て老いて益壯んだ。所が日本人は、兎角年を取ると意氣地がなくなる。私は既に學士會院で、隱居家習弊害論を演述した位で、隱居と云ふ事は、甚だ宜しくないと云ふのだ。譬へば文を作り、詩を作る上でも左樣だ。老年になつてからの作物は、非常な退歩をするので、梁川星巖の晩年の作など見ても、誠にダラシがなくなつて居る栗山などでもさうだ。又詩文許りではない。書も左樣だ。繪も左樣だ。私は甚これを遺憾に思ふ』と余に語られだが此意氣があればこそ、今でも昔に變はらぬ辯舌を揮はれ各所の講演會に臨まるゝのも、敢て勞とせられぬ譯てあるのだ。

▲博士の辨舌、は速度が至つて緩やかで、諄々と說出さるゝ所は、先づ穩雅精練と評すれば當るであらうと思ふ。又博士の文章は之れを唐宋八家中に求むれば、正に歐陽永叔であらう。歐陽脩の文は、老泉の所謂『窮言竭論而容與閑雅』である。余は博士の文章は勿論其辯舌も又窮言竭論して而かも容與閑雅なる所があると思ふ。誠に秩序整然、縱橫辯論されても其主意が能く分る。唯、『でくる（出來る）』『ぢやに依つて』の薩州訛りが目立つて聞ゆるのは、これは已むを得ぬ。

（中）

詩經書經が御得意――一齋先生の面影――一齋は能辯――息軒は叱付けるやう――艮齋は多辯――林述齋の苦心――講釋を三等に分つ

▲博士は經書の中でも、詩經書經が最も御得意で、其講釋の口調が、佐藤一齋先生の面影があると稱はれて居る。博士が嘗て余に語られたには『漢書でも和書でも、講釋と云ふ事は、なか〳〵難かしいもので、私の相及んだ先生の中では、佐藤一齋が一番旨かつた。能辯ぢやつた。安井息軒は不辯者で、且つ甚しい短氣、全て叱附るやうな講義振ぢやつたさうだ。多辯なは安積艮齋であつた。一齋と同門の若林

某といふ人は、又特別に上手ぢやつたさうだが、私は知らない。

▲一齋先生の上手ぢやつたのは、抑々原因があるので、一體に林家は、すべて講釋が上手ぢや。就中述齋は林家中興の器量人だが、譬へば論語の何章を將軍家に講釋をして聽かさうとするに、三十日も前から、門下の一齋と共に、一章を二つに分け、抽籤で前後を極めて、毎日々々、稽古をする。そして自分は大學頭で、旗本の身分であるから、正可に往かれぬので、一齋其他の人々を、毎晩輪番に市中の寄席へ通はして、時の講釋師、落語家の名人と稱はれる者の口調を聽きにやつて、さうして晝間は兩人して、夫等の講釋振を參考して、其の口調を上品に直しては、他の門生共をも大勢集めては、講釋の稽古をする。先づ昔から此位熱心に講釋に就て研究をした人はないので、それだから述齋でも、一齋でも、艮齋でも、若林某でも上手になる譯なのぢや。

▲其他林鵜黃（所謂小林家）又松崎謙堂なども旨かつたよ。藤森大雅も多辯の方でなか〳〵上手ぢやつたが、艮齋は一寸趣きが異つて居た。能く辯ずる事は辯じた

が、奇麗ではなかつた。然し拙い方ではない。例の智德民――如來先生と稱つた、アノ人も又能辯を以つて聽えて居た。管子が得意で『衣食足而知禮節倉廩充而知榮辱』の章を、最も得意に講說して、米澤の鷹山公などは、非常に尊崇して居つたと云ふ事である。

▲又私が一齋翁から聽いた話に。翁は、講釋を三段に分けたさうで、長上の人――即ち將軍家や大名等の前でするのと、それから目下の者にするのと、又其中間が一つ――即ち學者、學生に向つて講ずるのとの三等がある。常に其相手に依つて仕振が自から違ふから、斯く差別をせぬければならぬ』と云つて居られた。

（下）

克己復禮と棒讀みにせよ――經書は重に古註――地名、人名が困難して起立――上發案の文章――期せざらんやを期す――議場人なきに至るま

▲博士の講義は無論だが、演說の場合でも、重に書物を携へて登壇され、本文を朗讀して其主意を敷衍される。譬へば『克己復禮』と云ふ演題の時は、論語を聽衆に示され『諸君、拙者の此所に持つて居るのは論語でありますが、顏淵の篇に克己復禮の四字がありまするので、ちよつと其本文を朗讀します顏淵問レ仁。子曰克己復禮爲レ仁。一日克己復禮。天下歸レ仁焉。爲レ仁由レ己。而由レ人乎哉、朱註に克勝也己謂身之私慾也とあるので、大抵は克レ己復レ禮と訓むやうぢやが、それは不可ない。克己復禮と棒讀にした方が宜い。

▲何故なれば己と云ふを、一身の私慾に解釋するのが間違で、單に我一身と云ふ事なのぢや。決して私慾と云ふ意味ではない。又古註に克約也とあり。左傳には刻己復禮と刻の字になつて居る。刻は時刻の刻で、一時二時と刻限の極つて居るやうに我一身を刻約して、放縱ならしめざるのである。下の爲レ仁由レ己の己は無論我一身――我心と云ふ事ぢや。一方の己を私慾と解して、一方を單に我身――我心と解するのは、既に一章中に於て、矛盾して居るではないか。故に双方とも己と云ふは我身と解釋せねばならぬ。程朱の說は、陽に佛說を排して、陰に之れを採つたので、大分孔孟の主旨とは違ふ』と云つたやうな風だ。

▲其他の演說講話、又洋行中の見聞談を演述さるゝ場合でも、必らず地名、人名、年代、數字等は、詳細に認められたものを、講演が濟んでの後速記者に參考にせよと渡されるので、速記者は非常に手數が省けるのである。速記者の第一に困難するのは、此、地名、人名、年代、數字にあるのだから、すべての講演者が、博士の如く、せめて地名と人名だけでも書いて渡されると、それは餘程の便宜を得るのである

重野博士の演說振

▲第二議會の劈頭（明治二十四年十一月二十七日）貴族院で勅語奉答文を議した時に、博士は其文章を修正すべく動議を提出した。其奉答文は

（上略）臣等謹テ聖旨ヲ奉體シ專ラ帝國ノ隆昌ト人民ノ幸福トヲ以テ目的トシ益々大憲ノ條章ヲ格遵シ所見ヲ啓瀝シテ以テ皇猷ヲ贊襄スル所アルヲ期セザラムヤ臣等恐懼ノ至ニ堪ヘズ謹テ奉答ス

▲朗讀終るや博士は直に起立して『其結語の期せざらむやとあるのを期すと致したうございます』と發言され、西村茂樹氏之を贊し、議長峰須賀侯は、可否を議場に諮ふたが、遺憾ながら少數で消滅して、議長は直に散會を宣告し、議員は盡く退散して、議場人なきに至るまで、博士は猶起立して居られたと云ふは、眞に博士の本領が發揮されて居るのである。

（四七）徳富氏蘇峯氏

（上）

野蠻の相形——色氣の無い道口——氏の演說は寫色——拙辭の妙と趣味の津々——張出大關の位置——伯知と左樂——膽炎ト羊羹

▲氏は態度音聲共に、他の演說家と全て異つて居る。大概の演說者は、演壇に立つ

時は、稍々反身になり、少し澄して聽衆を見廻はし、それから水を飲んで、手巾で口の邊を拭ひ、咳一咳して『諸君』なんぞと始めるのであるが。氏はさうてなく、一向に容體振るところがない。又近頃は餘程ハイカラに成つたやうだが、自然に具はる野蠻の形相は、到底隠すに隠しきれず、其の一擧手一投足の間に、チラチラ現はれるのであるが、それが又氏の尊まるゝ所以なのである。だから其演說も、世の所謂學者の如く、長たらしき Introduction を聽かせて、モーお仕舞かと思う頃、漸く本題に立入つて、聽衆を喫驚さすやうの事は無い。氏は單刀直入。敢て飾らず、誠に以て色氣の無い遣口である。

▲其音聲は、一種異樣の響を發し、其調高からず、太からざれども、能く四隅に達して、聞苦しい所が無い。若し色別けを爲ることが出來れば、或は鶯色にでも屬すべきものであらう。此點から云ふと、能辯術てふ上から、氏は第一流の演說家とは言へまい……言はれたくもあるまいが。人は其第一流先生よりも、却つて氏の演說を、喜んで聽く傾きのあるのは妙だ。これには何か、一種の特長を有して居らねばならぬ。而かして其特長と云ふべきは、措辭の妙と、趣味の津々たるに存するので、畢竟其一言、一句の間に、言ふに言はれぬ面白味があつて、聽衆が嬉し喜んで、自つと耳を傾けるやうになるのだ。けれども決して樂りは些とも無い。今一つの特長とも謂ふべきは、其觀察の鋭利にして、且つ平凡ならざる所に存するので、即ち迂遠ひ、迷ひ易きやうな例を用ゐず、悉く人をして首肯せしむる活例と好材料と、自由自在に使用するの妙に至つては、何人も及ばぬ技倆を有して居る。氏は第一流とは爲されぬが、去りとて第二流とすべきで無い。番組面には、暫く氏を張出大關の位地に据えるが、適當であらうと思ふ。

▲氏の演說が、人を引きつける今一つの原因は、智識が該博にして、趣味の多方面たるに因るので。例へば政治を論じ、教育を談じ、宗教を說き、又は文學美術、何事として通ぜざる所なく、專門家の講演よりも、寧ろ優る趣味を發揮することの出來る如きは、偉大なる技倆と謂はざるを得ぬのである。或人が氏と松村介石氏とを比較して、演說の巧拙を彼是云ふたことを聞たが、そは伯知と左樂とは、何れが上

手なる、膾炙と羊羹と何れが旨さかの問を發する樣のものにて、皆人の好不好に由るので、決して比較論評すべきものではあるまい。今一つ思ひ出したから云ふが、氏の演說は滑稽に富んで居る。又時々ノン、センスを語る。これが又如何にも巧妙にして、思はず知らず、人の頤を解く、故に氏の演說は幾ら長くとも、聽衆を倦ませることは無い。

（下）

近頃は大分肥つて來た――會話と演說――演說は素人藝――文壇と演壇とに一異彩を放つて居る

▲態度も近頃は昔と違つて、餘程肥つて來たので、さう見苦しい事もないが。さうかと云つて餘り感服もせぬ。然し兩手を組み、又は卓上に置き磊落な所がある、氣取るやうに見えて、一寸稚氣を帶て居るのが好い。

▲氏の談に『演說は私の本領ではない。自分は新聞記者であるから、書く上に付ては、十分責任を以て書き、又研究もする積りだが、演說は自分が當然爲すべき職分以外の事であつて、言はゝ道樂に過ぎぬ。素より言ふ事は、責任を以て言ふのであれども、其言ふ事が好。く受けるとか、受けぬとか云ふ點に就ては、何等の考へもないのである。別に下手い演說をしたからと云つて、自分は、恥辱とも何とも思はぬ。始めから演說家にならうと思つたこともなく、從て演說と云ふことに、重きを措いて居ない。然し折角言ふなれば、自分の云ふた事が、人に了解さるゝやう、且つ人に徹底するやうに言ひたい、と思ふのである。

徳富蘇氏の演說振

▲演說をする前に、趣意だけは、ザッと考へて置くけれど、其外の事は、壇に立て

聽衆の顏を見てから演るのて。詰り會話は一人若くは數人、演說は數十人、若くは數百人、數千人と云ふことであつて、人數が多いと云つて、これに對する態度の變らう筈はない。人に應接するときは、一々草稿を作つて居ることの出來ぬやうに、演說をすることも、矢張其通りである」以て氏の演說に對する感想を訓ふとが出來る。

▲又氏は「自分は聲が惡い。又乏しいから演說に適せないことを承知し居る。從て演說家として立たうと云ふ考もなく、又研究もしない。これはホンの素人藝て、夫れも一年に一度か二度位なものだ。若し自分に今少し音聲があつたならば、或は研究もし、又演說家として立たうと云ふ考が起きたかも知れぬ」と云はれたことがある。而も氏の演說は、巧妙なる措辭と津々たる趣味とは、人をして傾聽せしめ、其終るを惜ましむる位なので、なか〳〵素人藝てはない。全くの黑人てある。が、成程今少し音聲が好かつたならば、更に一段の光彩を放つてあらうに誠に惜い事てある。

▲氏は他の人と異つて、餘り多くの演說をせぬ方てあるのに拘らず、多くの聽者を有つことの出來るのは。氏の常に總ての事に、勉强し、精勵し、刻苦して、殊に新聞經營に付ては、大確信、大發展をなす所の、その精力を有して居るからである。兎に角當世の文壇に於て、一異彩を放て居る如くに、矢張演說に就ても、一異彩を有して居るものと謂はねばならぬ。

(四八) 宮川經輝氏

(上)

海老名は常陸山、宮川は梅ヶ谷——剴切にして明瞭——パッと水玉の散るやう——恰も鏡を突くやうな聲だ——伸縮自在の妙

▲方今基督敎者中て、雄辯家と云へば、東に海老名あり、西に宮川ありとまて稱はる〻位て、氏は斯界全體を通じて、第一流の辯者てある。否、辯舌としては、日本人中の第一流てあらう。氏と海老名氏とを比較して見ると、甞て宇田川文海氏の評した如く、海老名は常陸山てある。宮川は梅ヶ谷てある。其の辯舌の巧妙と、老練と

云ふ方から云へば、海老名以上であるけれども、其堂々たる點より云へば、氏は海老名氏に遠く及ばない。而かも氏の辯舌の、他に優れたる所は、那邊にあるかと云へば――即ち氏の辯舌の長所は、思想の深遠にあらずして、如何にも凱切に、明瞭に聽ゆる所に味があるのだ。氏が一度其鋭利なる舌鋒を揮ふ時は、人をして笑はしめ、泣かしめ、慨かしめ、自由自在に聽衆の感情を左右するの力を有して居る。

▲氏の辯舌は、多少派手やかな所もあるが、又雄大の所もある。其堂々として、論じ去り論じ來つて、佳境に至る時は、恰も奔湍巖に激して、水玉のパッと四方に飛散るやうな工合である。然しさうばかりでもない。時として不出來のこともあるが、これは誰にも有内のことである。氏の演説の、如何に聽衆を Charm するかの例を擧げて見ると。或時氏の演説が、高潮に達し、其調子が、さながら打寄する大浪の如く、引返へす漣の如くであつた。すると其前に居た七八人の小供が、なか〳〵氏の演説の、解らう筈はないが、一齊の手を左右に打振り、サッ〳〵と小聲に唱へて、氏の演説の拍子を取つて居たといふ事である。

▲氏の音聲は、少し高過ぎはせぬかと思はれる。朗々たる音樂的ではなくして、恰も鐘を突くやうであるから、音聲の點に於ては、海老名氏を以て、氏に優ると云ふ者もある。初め氏は、辯舌が極く拙く、其友人からは、到底其説教などは、思ひも寄らぬとまで云はれたのだが、或時某大家の演説を聽いて、非常に感奮して、それからと云ふものは、一意專心に辯舌を、練りに練つた結果、今日大雄辯家と稱せらるゝ迄に至つたので。氏の辯舌は、其天然の辯ではなく、鍛えに鍛え、錬りに錬つたのであるから、辯舌に精しい人から見れば、其習練した跡が、歴々と分かる位である。

▲氏の演説の組立は、高尚な道理や、難かしい理窟を以て材料とせず。何でも卑近なる事實を取つて、直ちに之を人の肺腑に打込むのである。而かして其の演説が、或時は長く、或時は短く、伸縮自在の妙に至つては、誠に人をして、感に入らしむるのである。

（下）

―髭の中から顔――大學目藥の商標――宮川ヒゲ輝――大坂のハゲ輝―
―態度が喧嘩腰――三十年一日の如し――關西の重鎭

▲氏は又、言葉遣が非常に上手で、抑揚、波瀾、緩急、高低、能く其度に適ひ、少しも冗長の所がなく、聽衆を倦かしむるが如きことは、極めて少ない。兎角引合に出すやうだが、海老名氏は、近頃演說に重きを置かず、一つ己の頭を聽いて貰ひたいと云ふのであるから、演說が說明的で、多少くど〳〵しい所がある。氏はこれに比べると、餘程簡潔で好い。此演說は短かい方が宜いと思ふと、直ちに本文に取掛つて、三十分位でサッサと切上げて了まふ。又時と場合とを見、其聽衆の如何によりて、旨くそれに當箙まるやうに演說せらるゝので、其臨機應變の才に至つては、眞に敬服に堪えない。

▲氏の風采は、髭の中から顏を出したと云つたやうに、顏中髭だらけで、頭が奇麗に禿げて居る所は『大學目藥』の商標ソックリだ。尤も『大學目藥』本舗の主人は、非常に氏崇拜で、一家擧つて氏の洗禮を受けて居るさうだから、或は氏をモデルとして、彼の商標を考案したかも知れぬ。同人間では、氏を宮川ヒゲ輝と綽號して居る。全く『丹波の笹山から生捕つた熊でございい』と云ひたい位だ。又大阪のハゲ輝と云ふのも氏の事ださうだ。

宮川經輝氏の面影

▲氏の長所は何事も一心になれば、成らざるなしと云ふ質の人で、從つて其演說にも、人の意志を動かすの力

のあるのは、畢竟氏自身の意志が強いからで、氏の修養の深い事は、自から其辯舌の上に現はれて、氏の演說を聽く時は、思はず襟を正さしむるのである。意志の強い點に於ては、海老名氏も遠く及ばない。自身の修養をして、それだけ反響を人に及ぼす事が出來るのである。

▲氏の態度に面白い癖がある。手を妙に高く組んで、恰も力むやうな、まるで喧嘩腰のやうな風をされる。又其組んだ手を、バッと左右に擴げる事もあり、何の事はない、一、二、三と體操でもするやうで、誠に滑稽に見える。風采は、確かに海老名氏の方が優つて居る。

▲氏は、殆んど三十年一日の如く、同一の敎會を牧して居らるゝ程の先輩で、頗る信用があり、今は組合派の會長として敎會全體を統率して居らるゝので、其言行が自から人を畏服せしむる所がある。唯、氏の長所にして短所とすべきものは、自己の意志が強いのと、才氣の餘りに、鋭利なるとの二つである。それが爲めに他の欠點が強く分り過ぎる。隨つて人を責むる事が厚くなる。これが時として、他の感情

を害ふ事の原因となるのである。此點は海老名氏とは違ふ。海老名氏は言語の上でも、他を奬勵する方の側であるのだ。

▲氏は三十年も大阪に居らるゝのだから、其土地を去り難い事情もあらうが、萬一中央の帝都に出らるゝならば、演說に於ても、大阪式より脫化して、眞に日本的となり、更により多くの感化を及ぼし、効果を得らるゝであらう。斯界の有志者中でも、大分氏の東上りを希望し、東京へ引付けやうと、計畫して居る人もあるやうだ。氏も果して茲に意あるや否や。要するに斯界に於ける關西の重鎭として、尊敬推重すべき人は、夫、宮川氏なる哉。

(四九) 田川大吉郎氏

首を傾けて考へる——辯少し氣取る所がある——極く切口上——半文半言體の文章——奇々妙々の演說

▲氏も演說家として、なか〳〵熱心なもので、演說と云ふ事には、隨分研究をされ

て居る。氏の態度は、兩手をカクシに入れ、首をちよつと傾けて、考へて居ると云ふ風をされる。夫故少々氣取るやうに見えるので、これが氏の癖なのである。言語は極く切口上で、醫家の山根正次氏に似て居る所がある。

▲氏は嘗て、珍らしい演說をされた事がある、それは半ば文章、半は言語と云ふ、頗る珍妙なものだから、今其中の一、二節を紹介しやう。演題は『今日の社會と分捕』と云ふので、卅五年三月八日理想團演說會に於て述べられたものなのだ。

▲『諸君。同鄕に於ては相爭ひもせん、一たび異鄕に出でゝは、一樹の蔭、一河の流も他生の緣。日頃は見もせず、知りもせざれ、同じ顏色、同じ目付、同じ聲音、同じ風采、同じ體格は何よりの證據に、同胞の交り、忽ち割なき中と爲り、遠き親類より近き他人の利害を共にし、窮通を共にし、艱樂を共にし、榮辱を共にし、浮沈を共にし。死生を共にするは、すべての人の情なるべし。東西古今の違ひ無き所なるべし、況んや大砲の響き、おどろ〳〵雷の如く、小銃の丸、雨の如く降りしき、煙逆捲き、肉躍り、動き、擊つか擊たるゝか、勝つか負くるか、死生の機、間髮を容れず。擊つも、擊たるゝも、勝つも、負くるも、皆君の爲、國の爲との高尙なる觀念、凜々しき勇氣、張裂んばかりに、張詰めたる必死の場合に於てをや。人の血、此に於て始めて神聖に濺かると、エドモンドパークが定義せしは眞なり。眞ならざるべからず。必ず眞ならしめざるべからず。而して多くの場合は、其必らず眞實無妄ならざるを證明す(以下略)』と云つたやうな前提で。これから盛んに例の山口素臣、眞鍋斌等の分捕事件を攻擊されたのだが、まるで論文でも讀むやうな、奇々妙々な演說であつた。然し氏の熱心と又多少前以て稽古されたものと見えて、誠に面白く感じた。

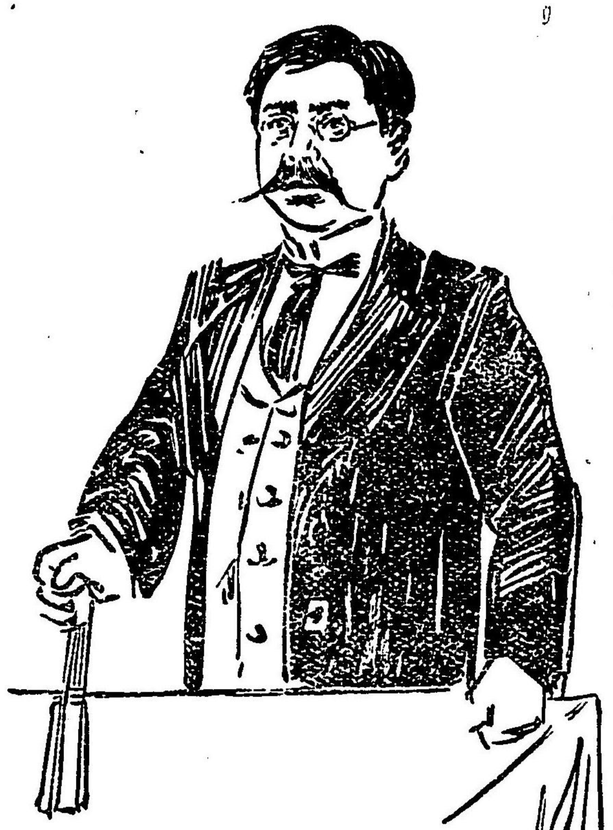
▲氏の談に『私は演說に就いては、少多考を有て居る。世の中の人は、文章を書く時は、こいつ後に遺すものだと思ふから、隨分練る事もあらうか。それが演說となると、即席即座、出鱈目を云つて平氣で居るのは、極く惡るい事と思ふ。外國人などの話を聽くに、大抵は一週間前位から演說の腹案も作り、稽古もするさうだが、誠に尤の事で、私もさうありたいと思ふのである。

▲それに言語と云ふものは、大切なものであるが、日本の言語は誠に亂雜で、締つた力のある話は出來ない。それで私は一層の事、半文章體にしたら宜からうと思ふ。譬へば謠曲でも、淨瑠理でも、隨分美しい言語、難かしい文字などが入れてあつて、調子の上下に依つて、夫等の文字が、旨く調和されて往くのである。故に私も半言半文體の演說を創めて、それが旨くやれさへすれば、別に可笑い處はない。却つて將來雄辯と云ふのも、斯う云ふ處から生出て來やうと思ふと』言はれた。

（五〇）石川半山氏

綽號『らんちゆう』――扇を演壇に突く――無理に落付かうとする――
――非常の熱心家――金魚演說、元老演說――人好きのする演說振

▲氏の演說も、なか〳〵巧妙なもので、聽いて居て、成程々々と感心するやうな辯舌である。氏も演說と云ふ事には、隨分浮身をやつして、稽古をされたもので、音聲の調子かち態度の工合まで、餘程研究を積まれ、演題なども非常に苦心して附られる、從つて氏の演題は、常に一種獨特の觀がある。此點は木下氏などゝ、一寸似て居る所がある。



石川半山氏の演說振

▲氏の風采は大の猫背で、顏がポテ〳〵として圓く、眼も飛出したやうに大きく圓く、身體が比較的小兵で丸々とした所から髭や眉毛の工合、品格の好い所、ソリ〳〵歩く所などが、全て金魚の金鑄ソックリだ。

▲而も演壇に上つて、無理に落付かんとし、妙に威嚴を張らんとせらるゝので、何

石川半山氏

となく滑稽になる。却つて天眞爛熳、書生流にされた方が、眞摯て宜くないかと思ふ。手はいつも物を抱くやうに組んて居られたり、又胸先の時計をいぢる癖がある。いつも空を向いて演說されるので、これを『天文演說』といふのだ。以前は能く扇を持つて登壇された(尤も夏の事てはあるが)氏の談に『何うも日本人は、演說の態度が下手だが、僕は扇を以つて演壇へ突き、又扇で前方を指すやうにして演說するのは、なか〳〵奥床しいもので、僕は好んて扇を持つて登壇したものだ』と言はれて居た。

▲氏は何事にも熱心で、昨夏腦病で卒倒された前までは、終日終夜、手より書卷を放された事がなく、途上車中てすら、常に書見して居られた位の勉强家だ。從つて自家の演說許りてはない、他の演說を聞いても、其論旨、口調、態度まて、非常に注意を拂はれるので、氏は方今我國の、有ゆる名士の態度、口調を熟知され、何人の癖でも、氏に就て質けば直ぐに分る。

▲氏の談に『伊藤公は、演說中に、右手又は左手を以て、マスタッチからベアー迄、髭を撫て下さるゝ癖がある。大隈伯は、右の拳て物を掻込むやうな癖がある。大石君は米春さ演說て、河島醇君は蕎麥切り演說、故河津祐之君は鐘撞演說、小室重弘、望月小太郎君は拳骨演說、野間五造君は指拍子演說、杉田定一君は則ち〳〵演說、板垣伯は然るに〳〵演說、尾崎行雄君はコスメチックの演說など數立てると妙な癖のある人も澤山あるものだ』と。余は氏を評して『天文演說』『金魚演說』又は『元老演說と』云ひたいのだ。

▲『元老演說』とは氏の演說中に、伊藤、山縣、大隈、松方、井上等の、所謂維新の功臣、明治の諸元勳と稱せらるゝ人々が、引合に出ない事のないからてある、イヤ『伊藤の話て見ると何うだ』とか、ヤレ『大隈に遇つた所が斯う云つて居た』など、元老諸公を自己の友人の如く、同輩の如くに言はるゝのて、屹度元老を擔がるゝのか例てあるやうだ。要するに氏の演說は巧妙精致てあり、又或るホームの中て、フアミリーと共に食卓を圍んて談話を聽く樣な氣がして何となく人好さのする演說振てあるのだ。

（五一）圓城寺清氏

數字の記憶――異彩を放つてた演説振――一種異樣の風采――演壇の正面に腕組をして立つ――一切草稿を作らぬ――物憂い感じかする

▲氏は、尾崎行雄氏の演説に私淑せらるゝさうて、態度も非常に莊重て、聲も澄渡つて、極めて堂々たるものである。いつも數字が能く出るので、何百萬圓、何千萬圓、何億萬圓と云ふ金高、其他の統計を精細に記憶されて居て、無論原稿なしにべらくと遣つて除けられる所は、頗る美事なものだ、數を基礎としての演説だから、空理空論に趨らず、如何にも堅實で、又何となく異彩を放つた演説振である。其上音吐が濟渡つて、朗々たるものだから、演説の主意が能く聽取れる。又氏はいつも草稿を作つた事がないので、理想團演説會の時も、又は對米問題に就いても、唯演壇に上つて即座に感じた事を述べられるのださうで、其中へアノ詳細の數字の入るのは、餘程記憶力が強くなければ出來ぬ事だ。

圓城寺清氏の演説振

▲氏の風采は顔も身體も丸々と肥つてクシャくと起の生えた工合、誠に一種異樣てある。服裝は洋服三分、和服七分と云ふ割合て、大抵は和服て演壇に上られる。洋裝は窮窟て嫌ひだと云ふ話だ、さうして、演壇の正面に、ヂッとして腕組をして、少しも動かず造付の人形のやうに、優しく突立つた儘饒舌て居られる、隨分長演説をされるので、足が痛くなると、漸くに身を動かして、演壇の左へ出られるのが例のやうだ。

圓城寺清氏

▲氏の談に私は演説は極く下手で、又無精の爲か知らぬが、是迄に演説に就て、修養とか稽古とか云ふ事を一切した事がない。夫故順序もなく、秩序もない事を饒舌つて居るが、何うも原稿などを作つて居る氣にならない。唯演説を大要五段、六段位に分けて、記憶し易すくして、それに順序、段落、例がいくつ、又どう云ふ論據であると云ふ事だけを腹案して壇に上るので、他のやうに、一週間前とか幾日前から、稽古などをした例がない』と、それにしては氏は餘程記憶力の強いもので、先づ圓城寺氏の演説と云へば、數字と直ぐに聯想される位で、增税問題などで、地租がいくら、酒造税がいくら、何税がいくら、而して外國貿易が幾億圓、歳出が何億圓、軍備が何千萬圓と精細に數字を比較對照して政府攻撃をされるので、滔々二三時間の演説に、政界の急所々々を論破して往かるゝ工合は、時々滑稽を入れて聽衆を笑はせるに拘はらず、何處となく物凄い感じがする位、政治演説としては實に上乘のものである。

（五二）井上豐太郎氏

一 背廣と獨演説――演壇に字を書く――ブル〳〵と震へる――首をクルリと廻して前へツン出す――一寸張子の虎のやうだ――演説には非常の熱心――衛生講話會が百二十九回も繼續して居る

▲ドクトル井上氏の演説振も一寸奇妙な所がある。今では麹町區會議員として、飯田町衛生組合長として、偶々壇上に立たれる位に過ぎないが、以前は言文一致會などで盛んに演説されたもので、いつも背廣服で禮服と云ふものは著けた事がない。それに獨り演説で頗る有名なものであつた。氏に妙な癖がある。説が佳境に進み、意氣軒昂する場合には、必ず指で演壇へ字を書かれるのである。又時に依ると、ブル〳〵と武者震をする事もある。風采も立派で言語も明晰であるのに、何うして彼樣に震へるのかと傍で見て居ても不思議な位だ。又面白い事には、氏は座談でも演説でも、話の段落毎に首をクルリと廻はしてヒョイと顔を前へツン出されるのは頗る滑稽だ。

▲氏の演説中で最も見る可きものは、明治三十四年七月帝國言文一致會に於ける『國體と衛生より言文一致の必要』と、同三十八年十一月同會に於ける『人種強健策』の二ッが最も喝采を博したのである。氏はなか〳〵演説には熱心なもので毎月一回東京眼科病院内に衛生談話會を開き、諸名士を聘して講話を請ひ、氏も亦一場の演説をする事になつて居るが、氏の演説の内容は衛生四分、佛教三分、教育三分と云ふ割合である。而して其衛生講話會なるものは既に百二十九回に達して居るので、之を見ても氏の熱心の

井上豐太郎氏の演説振

度合が分るのである。

▲氏は演説に熱心なるだけそれだけ、速記に就ても中々説を有て居られる。氏の談に『專門的の話は、素人方に解り悪いものであると云ふ事に付て、一例を擧げて見れば、速記なさる御方でも、衛生や醫學の速記をなさらうと云ふには、矢張特別の技能を有して居られる方で無ければ、完全に其速記が出來ぬといふことを、私は實驗したのである。專門家から見れば、何でも無い事であるけれ共、局外者から見ると、六ヶ敷いもので、速記をなさる人であれば、誰でも醫者の口から出る專門語や、病名などが分つて、速記が能く出來ると云ふ譯にはいかぬ。同じ速記家であつても、衛生學や醫學の速記に付て、幾多の經驗を積み、熟練した人で無ければ、到底往かぬといふことは、私が嘗て某會に於て、學校醫の問題に就て、演説したことがあつた。然るに其時の速記者は、醫學の速記に經驗のない人と見えて、私が腦充血と言つたのを腦溢血と取違へて速記したのであります。

▲もとより溢血と充血とでは、病理學上非常な相違がある。腦溢血と云ものは、小

兒には全然無いとは斷言は出來ぬかも知ぬが、吾々の知る所に據れば、先づ大人、俗に中風期といふ所の、四十歳以上の者に多いといふ譯てある。此二者は、醫學上大に區別のあるものてある。然るを經驗に乏い素人は、腦溢血も、腦充血も、同じに考たのか知らぬが、兎も角私が腦充血と云つたのをば、腦溢血と書いて、それが速記錄に載つて居る爲めに、井上は眼科醫てあるから、內科の方は一向知らぬだらうと思はれると困る。速記其ものは、文明の利器て極めて調法なものに相違ないのてあるが、速記家其人の注意が粗漏な場合には、往々間違が起つて、それが爲に或る場合には、演者が非常に迷惑をすることがあると思ふ。

▲故に私は速記と云ふは、中々六ケ敷い者てあると云ふ事を感ずると同時に、一面には速記者其人を能く選擇することの必要を切に認めたのてあります。一般の技術家、皆同じ事ではあるが、就中速記の技術の優劣に至つては、其結果に於て著しい相違のあるものと云ふ事を、深く感じたのてあります。』と語られた事がある。

（五三）木下尙江氏

（上）

背の低い幸德——ニコ〳〵した西川——ズングリとした堺——『火の柱』の篠田長治——慷慨志士の體——自己特有の落語

▲小說『火の柱』及び『良人の自白』の著者としての木下氏の演說も、隨分世間に知れては居るが、而も其演說に、一種非凡の能力と妙とを得て居る事は、比較的、否、殆んど世間に知れて居ないやうてある。

▲氏の平民社に在つた頃に、其講演を聽きに往つた人は、能く氏が能辯てあり、殊に其風彩態度に、一種言ふべからざる魅力を具へて居る事を知つて居るてあらう。アノ背の低い、容貌の凄い、語氣の鋭い幸德秋水、同じく中背のよく肥えた、莞爾〳〵した西川光次郎、ずんぐりとした小角力の如くて、時々慷慨口を利く堺枯川諸氏と相並んて、すらりと背の高い、眼光の鋭い、取つて附けたやうな下髭て平常も黑紋附の筒袖て、白の木綿の帶をくる〳〵と締た。此處宛然『火の柱』の、篠田長治といふ風采だ。これが其の當時の木下氏てある。

▲氏の演説振は、少なくとも、慷慨、熱烈、比喩、諧謔等の諸要素を、遺憾なく調和されたものと言つて好い。若し夫れ感慨胸を衝いて、滿々たるインスピレーション其の最高潮に達せんか、眼光一段の凄味を帶び、言々句々、一として聽衆の肺肝を刺さざるなく、兩手を胸に組み合はして、一入思入つたる其體、或は右手を上下に振つて、語氣に力を加へ、テーブルの角を摑んで、凝然と聽衆を見下した處は、慷慨の志士宜しくの體だ。

木下尙江氏の演説振

▲またそれかと思ふと、比喩、諧謔、口を衝いて出て、今迄手に汗して、肩を張つて居た聽衆は、總崩れとなつて、頤を解くといふ風である。而して又浮かり口を開いて居ると、湯藥を投げ込まれるやうな事が度々ある。氏は自己特有の落語に能を得て居るが、其の調子が、時々公開席の演説口調に現はれる事がある。而も毫も野卑な語句無く、俗受けを買ふやうな體が無い。これ氏の演説が、比較的諧謔滑稽の分子が多過ぎるに拘はらず、人をして毫も嫌味を覺えしめず、反つて增々威嚴の加はる所以であるのだ。

▲一方に斯の如き、感情的調子の演説に妙を得て居る氏は、また叙事的、説明的の演説にも秀でゝ居る。叙事、説明と云つても、少しも平凡單調の弊に陷らない。これ氏が、叙事的演説に多くの比喩を引き、往々諧謔を加味するからの事で、極く平易な事實でも面白く人に納得せしめるのである。加ふるに其態度の、如何にも人を引き附るやうな、思はず知らず、それに釣り込まれる趣がある。

▲若し氏の演説振から、其の態度を引き去れば、其の演説の力の六七分は失はれたものと云つてよい。安部磯雄氏なども、『木下君の演説は思想、口調、態度の三要素

が揃つて居るから立派なものだ』と賞めて居られる。

（下）

野武士の風采――尙江式演說振――三段論法流の口調――小說の才と
俳優の技倆――角袖先生の閲覽帳

▲氏の態度は、例の氏一流の紋附の筒袖姿で、宛然野武士の風采である。而して兩手を胸に組み合はせ、首を少し傾ける時もあるし、或は右手を長く、前方に伸し、聽衆を思ふ樣睨んだ所は、實に凄い位だ。氏が演說と云ふ事に苦心した事は、大したもので、以前信州に居られた時分から、石川半山氏などゝ盛んに演說の稽古をされたものだ。

▲氏が平民社の人々と、思想の相違から別れて、彼の『新紀元』なる雜誌を發刊し、頻りに物質的社會主義に對抗して、基督敎的社會主義の思想を鼓吹し、一方には毎日曜に、神田敎會で講演をやつた。此れが氏の思想一轉期に於ける活動の序幕である。基督敎的社會主義を唱道して、熱心に其抱負を吐露したものだが、これが又意外に一部の青年の人氣を得て、當時もゝ〳〵狹苦しい神田敎會堂は、滿員の有樣であつた。集まる者は單に青年ばかりては無い。壯年の人も、老人もあつた。其頃の氏の演說は、以前とは異つて餘程宗敎臭味を加へたもので、從つて時々神秘的な演說をやつた事もある。此れが又た一種獨特の演說振で、餘程重みのある、威嚴あるものであつた。風采も、前の筒袖は、いつの間にか洋服姿となり、一種顏に凄味のある下髭も剃落して、上髭ばかりであつた。然し天性は爭はれないもので、氏の語氣の鋭さ事、或は時には諧謔の加はる事抔、相變らず『尙江式』の演說振であつた。

▲氏は以前辯護士をして居つたゞけ、何處となしに三段論法流の辯護士口調がある。これが軈て公開演說者として、氏獨特のものとなつて、聽衆をして直ちに論旨、事柄の筋道を明確に了解せしむる所以であらう。以前法廷に立つて、辯論を戰はしたといふ經歷が、氏の辯舌をして今日あらしむる所以であらうが、氏は今猶演說に非常なる注意と苦心とを重ねて居る。いつかも聞いた事がある『雄辯家は小說の才能と俳優の技量とを併有するの必要がある』と、これが氏の演說といふ事に就いての持論らしい。而して氏は、自らこれが修養に苦心して居るのである。氏の演說を聽

くものが、氏の此持論を想ひ出して聞いて居ると、確かに氏の口調態度に、其の主義が現はれて居ることが分る。

▲終りに一言して置くが、氏の演説には、其種類の何たるかを問はず、必ず一人二人の角袖の先生が閻魔帳を持て、後の方にひかへて御座る。

（五四）幸德秋水氏

流石は皮肉先生――『辯士！中止を命じます！』を除め覺悟して演壇に上る――『無暗と』の連發――木綿針て背筋

▲明治の奇才、中江兆民氏の唯一の門弟として、兆民の死後、彷彿と其面影を留めて居るのは、秋水氏であらう。殊に氏の文章は、先師ソックリだが、それと同時に、氏の辯舌に於ても、遺憾なく兆民居士の面影が偲ばれる。

▲兆民居士は、嘗て血氣旺盛な時分に、印袢纏に紺バッチといふ扮裝で、勞働者を集めて屢々大氣焔を吐いたといふ事だが、氏も矢張、熱烈慷慨な口吻を漏らす方だが、扮裝は決して居士のやうてはない。これは氏の性格の然らしむる處てあらう。

▲小柄な、色の黑い、顏面痩せて、恰も秋の水に巖石が突兀と現はれて居るやうな、一種淋氣のある、然も何處かに凄みのある、一寸侵し難い容貌を持て居る。木下氏とは著しく、風彩を異にして居るが、演壇に現はれて直ちに其の思想、人格を偲ばしむる一種の力を具へて居るのは同じ事だ。

▲兩手を一寸テーブルについて、何だか苦味走つた顏を聽衆に向けながら、初めは少し小さい聲で始められる。流石は當代の皮肉先生と云はれるだけあつて、演說の最初から、十八番の辛口上が始まる。『吾々の如き無學にして且つ何の力も持つて居ない者の演說會に、貴重なる時間を費して御臨檢の榮を得ました事は聽衆諸君と共に厚く感謝致す次第てあります』などゝ際どい事を言つて警官の方をぢろりと眺め、聽衆に思はず『ソラ危い！』と怒鳴らさせる。

▲花井卓藏氏なども、隨分思ひきつた事を言つて、手に冷汗を据らせる方だが、如何も幸德氏ときては、此點て今一段上手にあるらしい。氏は殊に危險な處は、極めて巧妙な遠廻しでやつてのける。たとへば『我國には、決して斯の如き壓制を加へ

る者は無からうが、歴史などを見てみると、隨分外國には在るやうであります』と言つたやうな調子だ。

▲氏は常時も、大抵の演説（社會主義講演に於ける）は、一も二もなく臨檢の先生に中止の命を頂戴するものと、殆めから度胸をきめて居ると見えて『辯士！中止を命じます！』が、晴天の霹靂のやうに演壇の側から起つても、極く平氣な態度で居る。中止の命を食つて置きながら、又候やらかす。二度目の嚴命でやつと壇を下るのがお定りだ。

▲氏の演説は、木下氏のと異つて、非常に知的分子が多い。以て氏の讀書家たる事の一面を窺ふ事が出來る。然しそれだからと言つて、決して淺薄な説明演説に流れない。外國の事柄を引證しても、直ぐ日本の生きた事件、又は史上の事蹟に巧く比較せしめ、時々例のお極り口調の『無暗と……』といふやうな口吻を漏らし、それとなく悲憤の焔を吐き出す。

▲音聲は低い方だが、然し段々興が湧いて、胸が迫つてくると、成るべく大きな、疳走つた、ピンと人の胸に針を刺すやうな調子となつてくる。何だか少しも華麗でないが、寂氣のある所に、氏一流の慷慨口調がある。氏は何處迄も眞面目なだけに、聽く人に於ても、其の口調、態度を第二として、論旨を第一に聞かんとするやうになつて來る。木下氏の演説を聽いて居れば、胸に湯が沸き立つやうだか、秋水氏の に至ると、木綿針で脊筋をつゝかれるやうな思ひがある。

▲更に堺枯川氏と同じ演壇に併べて見ると、其の口調と云ひ、態度といひ、此れが果して同主義の人かと疑はしめる程、樣子が變つて居る堺氏のは、いつても演題が『人と犬』と言つたような風て、お噺てもやる調子で、遂には例の方へ漕ぎ付けてしまふ。丸々した身體で、而も語氣までが丸々して居る。秋水氏と來ると、總てが單刀直入的た。語氣に過分の毒を含んてゐる。

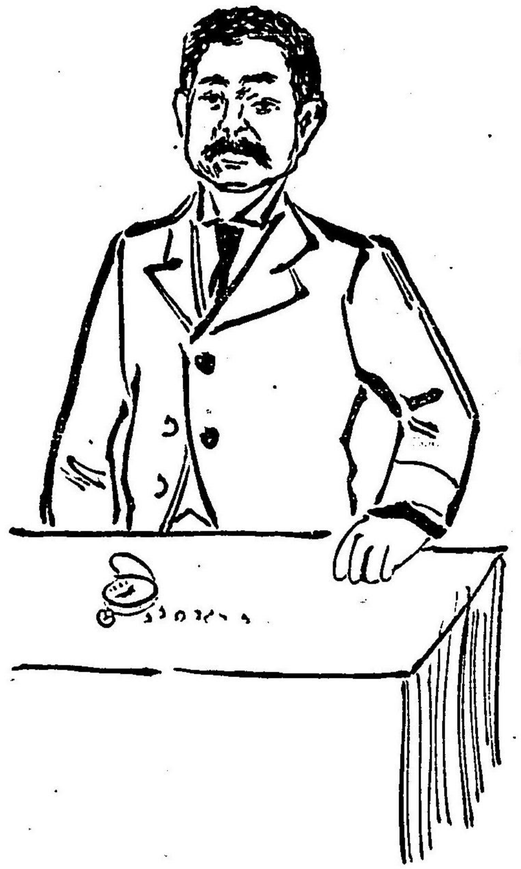
▲氏は年來の病身で、多大の思想多大の理想あるも、志意の如くならず、今はたゞ筆の人となり、靜かに其の抱負を披瀝してゐるばかり、あれだけの辯とあれだけの熱心とを以て、空しく地方に引込んて居らるゝのは、誠に惜しい事てある。

（五五）安部磯雄氏

（上）

氏の演說の長所——いつも同じ樣な背廣——溫厚の長者——和して同せず——時計を前に置いて演說する

▲氏の演說の長所は（一）演說の最初に、決して管々しき口上を述べざる事である。氏の演說はいつも直ちに本論に入るのである。（二）聽衆の呼吸に注意し、例へば、第一番に演壇に立つた時は、それに適したるやうに言廻し、最後に演壇に立つ時は、聽衆に飽き氣味のあるを察して、勉めて滑稽の文句を入れられるのである。（三）所謂演說句調を非常に忌むので、イヤに口調の上下をして、誤魔化すやうなのは大嫌ひださうだ。（四）氏の言語は最も明晰で、演說が非常に常識的思想に富んで居る。（五）材料又は引證として、自分の實際經驗されたる事を、極めて巧妙に應用さるゝので、實驗談の多い事は、氏の演說中見逃すべからざる特徵である。（六）一體に世の辯士は、議論的の演說は左程六ケしげもなくやるものだけれど、叙事的演說は、却つて六ケしいものなのだ。例へば旅行談などをやるのは、他の議論めいたものよりも、苦心が多いものだ。所が氏は此叙事的演說が最も得意である。



安部磯雄氏の演說振

▲氏の風采は、丸刈の頭、ふくらかなる兩頰、中脊にして、フク〳〵と肥えて居る。左の目の少しく眇して、却つて愛々たる和氣がある。いつも同じ樣な背廣で、フロックコートの姿は見た事がない。氏の風采態度を見ても、●●枯川氏の所謂『溫厚の長者和して、同ぜざる人』たる事が、證明されて居るのである。

▲氏は時計を前に置て演說する癖がある。これ或は氏が岡山で牧師をして居られた

安部磯雄氏

頃の習慣かも知れぬ。それとも時間を貴重にせらるゝのであらうか。氏は特別に雄辯家でもなければ、又達辯と云ふ程でもないが、唯何となく快活清逸で、恰も秋夜舟を浮べて、河を下るやうな趣があつて、水波瀲灩、清涼の氣が人に迫る、誠に品の好い、一種の趣味ある演說で、長く聽いて居ても、少しも嫌味のない、肩の凝らない、スラ〳〵として居るのである。怒濤澎湃、天をうつやうな、壯快とか、雄大とか云ふ慨はないけれども、眞に雄辯ならざる雄辯、達辯ならざる達辯とは、氏の事であらう。

▲氏は木下氏のやうに、派手やかな所はないが、如何にも流暢で、又何處となくズッシリとして、誰が聽いても能く解る。其材料も頗る適切で、實際的敎訓に富んで居るから、空を衝くやうな、薄ッペラなものではない。氏の演說を聽けば、氏が常識の最も完全に發達したる人たる事が、能くわかるのである。岡山敎會の牧師であつた時代は、氏は未だ二十三四歲であつたが、既にその頃から、演說がなか〳〵巧みて、何處でアノ位稽古をして來たのかと思はしめた位であつたと、これは石川半山氏の話である。

(下)

山氣の無い飾氣の無い遣口——聽くも聽かぬも勝手次第——當代の君子——眞の紳士——事理に當箙つた名論——雄辯十則

▲氏の演說は餘りに平易に、材料が餘りに卑近の爲めに、平凡だと思はるゝこともあるが、これが氏獨得の長所て、妙味のある所なのだ。氏の演說を聽いて見ると、如何にも山氣の無い、飾氣の無い遣り口て、他の演說者のやうに、手を振り足を踏み鳴らすこともなく、時に叫喚怒號、人耳を聾せしむるが如き奇態を爲さず、聽くとも聽かぬとも勝手次第、余は余が欲する所を述ぶる而已と云ふ風てある。

▲氏は實行的の人て、何ても自身の行ふ能はざることは、人に話さぬと云ふ主義てある。それて理想もあり、主義もあり、能く讀み能く考へる人てあるから、書いた物を見ても、語る所を聽ても、事理に當箙つた名論が、津々として溢れ出づるのてある。

▲氏に最も尊むべき所は、近世の極く新しい敎育を受けて居らるゝので、江原、島

●田、と云へば、撃剣、柔道から仕上げた人だが、氏はベースボール、テニスから仕上げたので、すべて新式の教育を受け、誠に能く青年を愛する。學校外にあつては、師弟ではない。まるで朋友である。これだから青年からも、兄の如く師の如くに敬愛されて居る。早稲田の講座は中々難ケ敷いとのことであるが、氏に取りては易々たる耳。何の苦も無い樣子である。即ち氏が修養の致す所であるのだ。

▲氏は演說と云ふことに、最も注意を拂はれ、時々新聞や雜誌に、雄辯術に就いての意見を述られて居る。又氏の雄辯十則と云ふは有名なもので、苟も辯論に志あるものゝ服膺すべき敎訓であるのだ。

▲嘗て田口卯吉氏の經濟學協會で、工場法に關する討論會に招かれた席上、●鹽島仁吉氏が冗談半分に、『今の勞働者は、厚遇すればツケ上り、直に同盟罷工などを企てゝ困る』と云ふと、氏は奮然として立上り、『●鹽島君は二十世紀の今日に、奴隸制度を再現せんと欲するか、これ紳士の口より發すべからざるの暴言なり』と一喝したる如きは、眞に氏の本領が發揮されて居る。

▲氏の風丰は堂々たる所はないが、溫乎たる容貌は、自然に人を引き附ける所がある。氏は四十歲を超えても、猶少年の意氣を存じて居るのが嬉しい。氏は運動家であると同時に、又非常なる勤勉家で、多くの時間を早稲田に費して居るに拘はらず。能く新聞雜誌に投書する。多くの演壇に、絕えず其雄辯を揮つて居る。多くの會合によく出席する。其精力の非凡なるには敬服の外はない。

(五六) 南條文雄師

他の辯士談僧と趣を異にす——表裏相照の人——年代月日まで記憶して居る——骨董店のやうだ——山陽木願寺學長にヘコマさる——

我田引水論

▲氏の演說說敎は、自から他の辯士談僧と異つて、確かに人を德化するの力を有て居る氏は言語に於て、應接に於て、姿勢に於て、行狀に於て、眞に宗敎家たるの態度を存して居るのである。世の所謂宗敎家と稱する人て、曰ては立派な鹿爪らしい事を言つても、退いて其私を省みれば、隨分嘔吐を催さしむる行爲をして居るも

のが、多い世の中だが、氏は能く其獨りを慎み、假令他の見ぬ所でも、其行爲は立派なものださうて、言、忠信、行、篤敬、表裏相應の人である。從つて其辯舌も應化力に富んで居るので、眞に氏の如きは佛敎者中の紳士と云つて可いのである。

南條博士の演說振

▲氏の演說の長所を云へば、歷史上の事實、又古人の姓名、年代等を具さに記憶されて居るのである。何と云ふ人が、何年何月何日には何う云ふ事をしたか、何年何月何日には何う云ふ事があつたとか、又、統計の數字を細かに暗誦されて、居るので、いつも聽衆をして其記憶力の强大なるに感服せしむるのである。又た頗る友情に富んで居られて、能く演說中に、友人故舊の噂が出る。亡友笠原氏の事は、常に涙を流して演說されるのが例だ。

▲氏が演說の欠點は、兎角枝葉に流れる癖があるのだ。簡潔と直截に說く事は、甚不得手で、紛糾錯雜、演說說敎の中途までは、何が何やら主意の解からぬ事もあり、無暗に古人の語や書物などを並べて、引例考證まるで古道具屋のやうだが、中途から氏自身も氣付かれると見えて『イヤ斯う澤山に古い事を並べたら、諸君に御解り惡いだらうから……』と、これから漸く話が一筋道になり、旨く結末を付けられるが、說半ばにして、ちよつと不得要領の所が、却つて好いのかも知れぬ。

▲それに氏は長く英國に留學され、馬博士の門に入つて、梵語學の蘊奧を究められ、其學殖の深奧なるは言はずもがなだが、ちよい〳〵演說中に英語を交へられるのが、どうもアクセントが妙に聽える。御經の調子になるので、何となく滑稽で、聽衆中にクス〳〵と笑ふものさへある。

▲氏は古僧の逸話などを澤山御存知て、又、日本外史を好まれて、能く演說中にそれが出る。外史に就いて能く話されるのは、例の山陽が、本願寺の學長にヘコマされたと云ふ事だ『これは私の父が師匠からの直話だが、山陽が日本外史を著作して、就中楠氏の卷は得意の文章だと云ふので、鼻高々と當時の本願寺學長の許へ見せに往つた。所が學長が一喝して言ふには、儒者賴山陽と云ふ者日本外史を著して、得意ゝして居るさうぢやは、彼は國を出てて三年、一度も母の許へ歸省せぬ程の不孝者である。儒家の言に、忠臣は孝子の門より出づとあるが、斯かる不孝者にして、忠臣楠氏の傳を記するとは、片腹痛い事ぢやと、一痛棒をくらはしたので、山陽縮上がつてしまひ、一言も發し得ずして退き、翌日早々旅裝を整へて、藝州に歸省したが、流石の山陽もこれには閉口した』と云ふ主意である。成程それは事實かも知れぬが、然し氏の口から度々此の話を伺ふと、何だか我田引水のやうな氣がしてならぬ。然し氏は一世の高僧、余の如きも數々氏の演說を速記して御陰で、佛敎の大要を知得したのであるから、いくら罪のない惡口でも、餘り言過ぎては濟まぬから此位にして置く。

（五七）長谷川泰氏

易と佛敎――始めは處女終りは脫兎以上――坊主不知經儒者不知仁――世渡りの武器と三身論――氏の講演を依頼するの秘訣

▲氏の演說は、いつも易と佛敎とである。其口調が始めは處女の如く、終りは脫兎以上である。大臣でも、金持でも、容赦なく罵倒する所は、頗る痛快なものだ。今まで極く叮嚀な言葉かと思ふと、急にベランメー口調になり、政府の奴等が〳〵などゝ、盛んに罵倒し始める、又『坊主不知經儒者不知仁』などゝ、坊主と漢學者、を手嚴しく、攻擊さるゝ事もある。演壇に登り、左肩を聳やかし、演說が長くなればなる程、面白味が出て來るので、聽衆に倦きが來ない。然し說が佳境に進むと、談論風發、縱橫無盡に論破せらるゝのは宜いが、其論旨の何れにあるかを疑はしむる位て、聽衆をして五里霧中に迷はしむる事がある。

▲氏の御得意の演説は『世渡りの武器』と云ふのである。これは能く拜聽する。其主意は『佛敎に四攝法と云ふのがある。四攝法と云ふのは、第一布施、第二愛語、第三利行、第四同事である』とこれに周易を加味して、詳細に説明されるので。譬へば愛語の一段の如きは『愛語とは、常に顏色を和らげて、ニコ〳〵と愛嬌タップリで話をするのである、即ち是が禮である。禮は説文に履なりである。履は兌の卦である、又少女なり、悅ぶなりであるから、常にニコ〳〵して、人に接するやうにせぬければならぬ。禮讓を以て人に接すれば、人の尊敬を受くるのである。然し兌は少女でもあり、虎でもある、虎になつて、往かぬ、人の尊敬を受くるのは、人心集攬法である。既に人心を獲れば、これを離さぬやうに、鎖で確と繋いで置かなければならぬ、其上又紐で結へて置かなければならぬ』と云ふのだ。

▲今一つ氏の御得意の講話『三身論——地獄と極樂の追分』と云ふのである。其一節に『例へば人の所へ、詐欺師がやつて參りまして、チャラを言ふ御前は、閣下は、などと言つて、おべつかを言ふやつは、必ず腹に一物あるので、金を貸せとか何とかいふ、碌なやつではない、さういふやつには油斷してはならないと云ふことを、ちやんと肺肝まで看破つてしまふ。詐欺師のやうな者も、聖人君子と取違へて箝込まれて、甚い目に逢ふ事がある。固いものは、固く見え、四角なものは、四角に見えるやうに、即ち智力を以て觀察致しますると、向ふの人や其事柄が有りの儘に見えまする。即ち社會の眞相を有りの儘に見える人には、人に箝められるといふ事がない、それを如量智と申します。地獄と極樂との追分は、此邊にあるので、物の眞相を看破する力がなければ、何事も成就するものではない』と云ふやうな事を述べられる。

▲氏は近來早稻田あたりて、ボツ〳〵と演説をされるが、各所から種々懇請して、講演を依頼して來ても、一切斷はつて了まふが、若し氏の出演を請はんとする人あらば、必らず氏を承諾さする一つの方法があるから、敎へて上げやう。それは氏の無二の親友に、道重信敎と云ふ僧侶がある。これは增上寺護國殿の主護をして居る人で、なか〳〵の名僧なのだ。氏は此人を大層崇拜されて、『天下の眞相は、南條文

雄と道重信敎の二人のみなりとまで、尊崇されて居る位だから、此道信師の往く所なら、氏も必らず往かれるのである。故に氏の講演を依頼せんとする人は、先づ道重師に出席を請ひ、同師が出席さるゝとなれば、長谷川氏も必らず出席さるゝ事は請合である。然らずんば如何に懇請しても、門前拂を食ふに極つて居るから、氏を引張出さんとするには、必らず先づ道重師を引張出すに若くはなしてある。

(五八) 田中喜一氏

歪つて無頓着——腕組をして突立つ——止せ〳〵やれ〳〵——止しませうかと相談する——泰西偉人の面影

▲東京高等工業學校敎授、早稻田大學講師たる氏の演說振は、ちよつと面白い。氏の初陣たる、明治三十二年丁酉倫理會で演說された時の光景は、頗る奇々妙々であつた。氏は風采などには一向に無頓着の人で、髮などもついぞ梳つた事がなく、蓬々と亂れた儘放つて置き、演壇に上つても、腕組をして、凡五六分は、無言の儘、突立つて居る。聽衆は呆氣に取られて、暫し辯士を瞶て居るが、其内に可笑しくなつて、クス〳〵笑ひ出す彼所でも此所でも、クス〳〵と笑聲の起る時分になつて、漸く口を開らき、『諸君』と云ふ。『諸君』と云つたなり、又默つて居る。二三分經つてから『私』のと云つたなり、又默つて了まふ。やがて三四分經つと、『今日の演題は』と云つて、又何も云はずに考へて居るが、又五分許り經つと『時代精神とは何ぞやと云ふのでありまして』と云つた限り、默つて居る。終には

田中喜一氏の演說振

田中喜一氏

聽衆も辛烈たくなつて『止せ〳〵』『引込め〳〵』の聲が盛んに起る。スルと又彌次馬は『演れ〳〵、演つてくれ』『なか〳〵面白い、休憩演說は面白い、ドシ〳〵演れ』などと混返す。

▲氏もそれには少しく狼狽して『イヤ諸君が止せと云ふなら止す。それでは諸君止しませうか』と聽衆に相談する。聽衆はドッと笑ふ。『止せ〳〵、引込め〳〵、相談するにやあ及ばぬ、早く引込め』と叫ぶ者もあれば『イヤなか〳〵奇拔で面白い、演つてくれ〳〵、僕はさう云ふ演說が大好きだ』と云ふ者もある。

▲『演れ』と云ふのと『止せ』と云ふのと、交る〳〵聲が相かるので、氏は今度は演壇の傍に、他の講演者や會の役員などが、椅子を並らべて居る方へ向つて、『何うです、演りませうか止しませうかな』と相談に及ぶ。會の役員達は、義理にも止せとは云へないから、『おやんなさい〳〵』と云つて拍手する。『それでは演りませう』と又腕組みをした儘、クルリと聽衆の方へ向直つて『何うも演れと云ふ方が多いやうですからそろ〳〵演る事にします』と云ひつゝ、又ボッ〳〵述べ始める。笑聲はドッと起るが、ビクともせず。其鎭まるを待つて又始める。此時の演說は、隨分奇觀であつた。

▲所が熟練と云ふものは恐ろしいもので、近來は非常に甘くなつて、演說の中頃よりは層一層の味の出る饒舌方をされる。氏の今の演說と、七八年前の演說とは、其巧拙の差に於て、まるで別人かと思はるゝ程になつた。氏の容貌性行迄が、理學博士田中正平氏に酷似し、其飾らざる風采が、却つて學者然とし、又豪壯にして洒落な所があつて、何となく泰西偉人の面影を偲ばせるのである。氏は演說許りではない、談話の時も、スラ〳〵と流暢に話さず、一語、一語、途切れ〳〵に考込んでは、後を續けられる風がある。氏の如きは矢張畸人と云ふても宜いであらう。

（五九）山路愛山氏

山路一流の演説振――『待つてました』と云ふ所をひよいと笑はれてしまふ――魚は日本橋、野菜は多町と大根河岸――板の腕次第――中央の演壇に花を咲かせて居る

▲氏の演説は、熱心で、如何にも奇拔で、而して歷史眼に富んで居る。是丈で言竭くして居ると思ふ。いつ聽いても、演説に一種啓發する所があり。人を未見の境に引付ける力があつて、全く山路一流の演説振であるのだ。氏の演説は、近來非常に上達して、其辯舌は流暢になり、大に老熟した所が見える。以前とは頓と趣を異にして居る。其代りチト通俗的になつて來た。寧ろ卑近に過ぎはせぬかと思はれるが、これは長野縣下を徘徊して、比較的低い聽衆に演説した結果でもあらうかと思ふ。

▲音聲も音樂的ではない。美聲とは云へぬけれど、清醇にして能く四隅に達し、人の心に徹するものがある。唯少し高過ぎるやうだが、然し聽苦しい所はない。確かにインプレッションのある演説だ。氏の容貌は、如何にも猛烈に見へ、人の一人や

二人は、打殺したと云ふ風體で、壇上で白のやうな身體を、右に運び、左に搬び、まるで肥つた何かゞ逍遙して居るやうに見えて、滑稽な所もあるが、然して

山路愛山氏の演説振

れが非常に愛嬌となつて、大いに聽衆を悦ばしめるのである。

山路愛山氏

▲氏は演説中に、笑出す癖がある。此笑ひの爲めに、非常に損な事があると云ふ噂だ。其理由は斯うである。氏は以前、少しく咄する癖があつたが、其咄する時、眼を見張り、體を伸ばし、右手を圓形に振向し、更に大きく聲を張揚げて怒鳴る時は、萬雷一時に墜るが如く、噴火の岩石を破るが如く、如何にも物凄い光景で、聽衆もさながら、雷火に打たれたやうであつた。だから咄する時が、最も美い時で、愛山の愛山たる所は、此瞬間に現はれるのである。然るに近來は前に言ふ通り、餘り田舍廻はりをして、敲いた習慣は、チト御愛嬌を賣ると云ふ風になつて來た。素人は却つて是を喜ぶかも知れぬが、氏を知る者は惜んで居る、此所ぞ一番張込んで、手を拍つて『待つてました』と云ふ所を、ひよいと笑はれてしまふことがある。尤もそれが惡るいとも言へまい。愛山程の人だから、いづれ考へて居るだらう。然し顏を見ると恐ろしいやうな、又可笑しいやうな所もある。

▲氏は好んで古書を讀み、其材料を用ゐて、新らしく話すのが得意である。最も古るいものは、最も新らしくなる。溫故知新の理もこれに外ならぬのだらうが、氏は新古の材料を豐かに取り、これを氏が、一種の哲學と信念とを以て、咀嚼し、消化して話すのであるから、殊に面白く飽きると云ふことがない。又氏の器用な點を云へば、魚は日本橋、野菜は神田の多町か、大根河岸に極つて居るが、板の腕次第で旨く客に喰はせると同樣で、ちよつとした材料を持つても、能く聽衆を滿足させ、首肯せしむるのである。

▲氏の演説の癖は、少しく首を前に垂れ、兩手を後に回はし。唾を飲込んで、吃るが如き樣子をする所は、蘇峯氏に能く似て居る。又手を振り動かしては、必ず後へ片附ける時、強く臀部を打ち、接近して居る人には、能く其音が聞えるといふ。蓋し斯かる時は、氏の演説方に佳境に入つて、聽衆を感服さして居る時である。氏はいつも演説が長過ぎたりト聽衆に欠伸を催さしたことはない。それは氏の性質として、諄々しい、氣の利かぬことを遣つて居らぬからである。兎に角氏は現時中央の演壇に、花を咲かせて居る。筆舌愈多忙請ふ自重せよ。

（六〇）中島觀琇師

隈言者郷に入れられず――ハテナは疑問、成程は解決――おつくり返へしむつくり返えし――活惚れの梅坊主ソックリ――品の好い皮肉

▲前増上寺管主たる師は、餘り世間に名は知れては居らぬが、宗教界では、なかなか高僧として、又有數の辯士として尊重されて居る。氏は茨城縣結城郡の人で、親に仕へて至孝、頗る郷黨に譽がある。『豫言者郷に入られず』て兎角生れた土地では、十分の信用を博し難いものだが、氏は生れた土地て僧となり、郷人より生佛のやうに尊ばれて居るを見ても、其人と爲りが想像されるのてある。

▲氏は淨土宗本校や、宗教大學、又は弘道會などへ出席して、盛んに講話せらるゝが、其口調が、如何にも通俗的である。譬へば罪と云ふ事を說くに、斯う云ふ口調て述られる。『何うも人間と云ふものは、罪惡の塊だ。此罪と云ふ奴がな、此畜生があつて、我々を苦しめるのだ。人間が赤い衣服を着るのは此畜生の御蔭だ』と案を叩いて絕叫される。

▲『疑問』と云ふ演題の時は『疑問と云ふのはハテナと云ふことだ。人間がハテナと、疑問の起つて來るのは、誠に結構だ。けれども、ハテナ丈て終つては詰らぬ。ハテナの起しつばなしては往けない。必らずこれを成程と解決せなければならぬ。成程とは覺てある。合點てある。すべての事がハテナに起る。ハテナは疑問てある。自覺てある。成程と合點して始めて自覺の解決が出來るのてある。事々の疑問は、事々の解決を要する。其ハテナと言つて成程と打消し、又ハテナと言つては成程と打消すおつくりかへしむつくり返へしして居るうちに、段々と修養の功を積んて、人世の疑問と云ふものが、自から解決さるゝのてある。唯疑問て終つてしまふやうな、グータラベーは往ぬよ』と斯樣な調子て、大きな頭を左右に傾けて、齒をむき出してやる所は、まるて梅坊主ソックリてある。誠に滑稽な人相てあるのだ。

▲氏の著書は、修身要領、十善講話など有名なものだ。氏は六十餘歲の老僧だが、非常に元氣な人て、又いつも雛僧等と、喜々遊戯して居る。書齋にある時は、讀書

をするか、念佛をするかして、一刻も休みなく、何かしらして居る。又書生を愛する事甚しく、いつも苦學の僧侶達が、氏の居室へ伺候すれば、必らず若干かの金錢を惠む。それは、オイソレとは出さぬ。散々小言を言ひ、理窟も言つた上にソレ、持つて往きな』と、紙に包んだ儘の金錢を投與へる。布施を貰つて來た許りで、中に一圓あるか、貳圓あるか、一向改めもせずに與へて了まふ、それは全く無欲なのだ。從つて其辯舌も隨分毒口を利くが、其毒口が何となく罪がなく、品の好い皮肉になるので、決して人に惡感を起させない。

（六一）嘉悅孝子女史

第二の三輪田、棚橋――政治家肌――粹翰長樣と許婚――倫讀を經とし我慢を綜とす――天照皇太神とヴキクトリヤ女帝

▲女子商業學校學監嘉悅女史の演說は、態度調子が、なか〳〵堂々たるもので、余の速記眼を以てすれば、女史と、女醫の鷲山彌生女史とは、後來女流演說家として第二の三輪田、棚橋として、確に成功するであらうと思ふ。女史の氣質はサッパリとして寛大で、沙婆氣があつて、ちよつと政治家肌がある。又其體格が、ッングリとした骨太で、太い明晰な音聲が、全く其性格と一致して居る。

▲女史は、例の粹翰長樣と許嫁であつたとか、なかつたとか、又政界の名士○○○氏より、結婚を申込まれたのを、肱鐵砲を喰はしたとか何とか、意外に艶種があるけれども、いまだに獨身主義だ。獨身で氣樂の爲でもあるか、演壇に立たれた風采は、何うしても三十前後としか見えぬ。實際のお年は四十であらるゝさうな。又其口調に非常な愛嬌があるので、益〻若く見えるのである。

▲女史はいつも、演壇の右へ出て、左手を演壇にかけ、右手を袴の下に入れて演說される、エ、それから、エ、それからと云ふのが口癖で、頻りに連發される。演說の初めに『私は演說とか講話とか云ふ事は、頓と不得手でありますが、今日は此御會で演說の稽古をさしてやると有仰いますから、御稽古を致す積りて上りました』などゝ、なか〳〵如才ない事を云はれる。次に『私は及ばずながら女生徒を敎育

しますには、武士道的、女房氣質、共稼主義の婦人を作りたいと思ひます、儉讓を經とし、忍耐を緯とすることが、女德の大眼目と思ひます』と言語

に眞面目の氣が滿ちて居る。

▲それから『私は嘗て斯う云ふ考を抱きました。それは世界女性史と云ふ書物の中に、支那では則天武后、また呂后など殘らず載つて居ります。日本では天照皇太神また神功皇后、さう云ふ方々が載つて居ります。また西洋ではカロリナ女皇、ジョセヒン、又英國のヴヰクトリア女帝等がすつかり書てございます。それを段々讀むうちに感じた事が二つてございました。其二つと云ふのは、日本の天照皇太神と、英國のヴヰクトリア女帝の御二人てあります。私は此お二た方の傳を能く讀むて見ました。それて此本の終りの方に付加へて書てありますのに、日本の女性を知らうと思ふならば、天照皇太神を知るに如はないと云ふてあります。それて日本の女性は優しくなければならぬ。其上又、日本の女性は強くなければならぬ。けれども粗暴てはいかぬ。天照皇太神は、慥に優しくつて強いと云ふことが書いてあります。之れて段々と其本を讀むていきますと、即ち天照皇太神とヴヰクトリア女帝とは、所謂崇高圓滿の方てあらせられたのてあります。何處までも女の範圍を出ない行

てあらせられた。譬へば素盞尊が大變にお暴れになつた。それが爲めに天の窟戸にお隠れになる。如何にも女として、弟の亂暴に堪へ得られぬと云ふ、優しいお心が見えるのであります。さうかと思へば、四方に君臨遊ばす御德も御才幹もあつた。ヴキクトリア女皇も、大英國を立派に御統率遊ばした。先づ日本の女子は、此御二た方を、及ばずながら理想として居れば宜いのであります」と說いて居られる。誠に趣意も好いので女史の演說の世間に歡迎される所以であるのだ。

(六二) 鷲山彌生女史

清新の趣味——醫學以外の演說——對診に男も負ける——子宮治療が得意

▲女醫として、近來メキ〳〵と售出したる、女史の演說振も、なか〳〵見上げたものだ。口調が如何にもハキ〳〵として、快潤に流暢に遣つて除けられる。秩序も立ち音吐も明瞭で、女子としては隨分大聲の方だ。それで一切原稿を作つたことがない、何時も即席で、心に浮かんだ儘を饒舌られるのださうだ。速記して見ても、重言もなく、冗談も少ない、

▲女史はなか〳〵演說には熱心で、毎月一回校風會で、講話をされる際も、後來女子として社會に立つには、何しても、演說か上手でなければ、成功せねと云ふのて、女生徒に、盛に演說の稽古をさせ、今では井出、水谷、寺元など云ふ門生は、それ〳〵上達して、婦人演說家として社會に出しても、恥しくないとまで云はれて居る。兎に角女醫學校を創設し、雜誌『女醫界』を發行し、女醫者として、拮据經營されて居る氣根は、なか〳〵柔弱なものては出來ない。

▲女史の演說は『健全なる家庭』『社會に於ける女子の地位』『女子の專門教育』『男女共學問題』など醫學以外の演說の多いのは不思議だ。尤も終には我田引水の衛生論になるけれど、一寸表題を奇にして、人氣を取る所は拔からぬものだ。病家なとて、男醫と對診する場合にも、默つて引込んでは居ず、ハキ〳〵と論爭されるので、男醫の方が却つて默つてしまふと云ふ奇觀がある。女史は流石に子宮の治療

が御得意で、學校などで講義さるゝ場合も、怯めず臆せず、子宮論をされて、生徒の方で、顔を眞赤にして聽く位ださうだ。成程子宮病などは、女醫としては御自身にも附物であるから、能く工合が解つて、男醫よりも痒い所へ手の屆くやうな治療も、出來るのであらう。

鷲山彌生女史の演説振

▲女史の壇上の風采は、或は洋裝の時もあり、和服の時もあるが、洋裝は似合はない、至極不調和であるが、和服なら能く似合ふ。壇の左に出て、兩手を垂れたり、又は左手を演壇に乘せ、ニコ〳〵して演説されるので、誠に女らしくて好い。

▲女史の演説で、一番上出來だつたのは、三十八年に、本郷中央會堂で『滿韓に於ける女醫問題』と云ふのであつた。滿韓經營の根本義より説起して、誠に堂々たるものであつて、鷲山など云ふ恐ろしい、イカツイ名ではあるが、女史が感情に激すると、ポロリ〳〵涙を流して演説される。

▲女史は多藝の方で、論文なども巧に書かれる。女徒生に演説などを奬勵される位だから、病院などへ訪問して見ると、受附や、藥局の女子までも、キビ〳〵したもので、遠慮會釋なく女史の平生の起居動作、長所短所までも、女史の前で、ドシ〳〵話す位で頗る磊落な所があつて、女史の氣象ソックリを受繼いて居る。

（六三）大町桂月氏

演壇上では意氣地がない――『演説家であるてあるて息をつき』――
カリ〳〵坊主になつて壇に上る――興に乘じて跳廻はる――外所往き
がない――赤裸々――女好きの相

▲氏は文筆縱横、文壇に於ける一方の雄將であるに拘らず、演壇上に於ては、カラ意氣地がない。氏は演説する前に、酒二合だけ熱燗して、グッと飲んで、血の循環をよくして、尙ほ疾歩して、更らに血の循環をよくして、さうして壇に上るのださうだ。然し中頃酒の力を借りて演説するのは、卑怯であると云ふので、酒を廢したさうだが、又近頃では、寒い時は酒を飲んで演説するのも、寒さ避けに宜いと云つて、又飲み始められたさうだ。少し營が當を失して居るかは知らないが、彼の北米合衆國の創建者、ワシントンが、殖民地の事に付て非常に盡力して、何か演説をしなければならぬ場合に、流石千軍萬馬の裡に往來した豪傑も、演壇上の勇者ではなかつたと云ふ話であるが、何だかちよつと似て居るやうな氣がする。

大町桂月氏

▲氏は土州人に似合はず、至極訥辯で、一言いつては、二三分間休み、又一言云つては、二三分間休む。誰やらの句に『落語家はげしてがしてを能くつかひ』『演説家であるてあるて息をつき』氏のは、てある處ではない。てあるの段落までには、どの位息を吐くか知れない。態度は兩手を握つて、壇上に突張り、稍々俯向にな

つて居る。顔を上げる事は、殆んど稀れてあつたが、近頃は大分上手になつて來て、ちよつと洒落など言はれるやうになつた。

▲然も氏の演說は、決して平々凡々、綿を嚙むやうな無趣味のものではない。其の演說振が、中々奇拔で、僧侶の攻擊をする時には、クリ〳〵坊主に、頭を剃つて壇に上り、盛んに氣焰を吐いて、聽衆の度膽を拔き。又興に乘ずると壇上で、手拍子面白く、例の西園寺侯に賞められた、名譽の美聲を張り上げて『土佐は好とこ南をうけて……』と謠ひながら、跳り出した事もある。

▲氏の最も豪い所は、斯う云ふ主義を以て居る。即ち『他所行の着物を着ない』と云ふ事である、他所行の着物と云ふのは、絹の着物とか、仙臺平の袴とか、又はフロックコート、シルクハット等を殊更に着けないので、物事に改まると云ふ事がない。演說も其通りで、公衆の前で饒舌るのだからとて、特に草稿を作つたり、言句を練つたりする樣な事はないさうだ。氏は萬事萬端此主義で押通さるゝのは誠に偉とすべき事である。

▲或は氏の演說を評して、出鱈目であると云ふ。又或は大町の演說は、淡白で、奇拔で赤裸々で好いと云ふ。何にしても氏の演說は赤裸々に相違ない。これは氏が好んで莊子を讀まれる爲てもあらうが、曾に演說ばかりではない、先頃西園寺侯の文士招待會の席で、侯に向つて『貴侯は女好きの相がある』と謂つた。側に居つた文壇の豪遊連は、手に冷汗を握つたが。流石に侯は『イヤ僕が女を好くのではない、先方が捨てゝ置かぬのだ』と云はれたので、大笑ひになつたさうだが、『莊子を讀んだのでなければ、ア、天眞爛熳、赤裸々に言へるものではない』と文壇の某大家は評して居た。

（六四）新渡戸稻造氏

（上）

通俗にして然かも卑近ならず——斷乎として所信を述ぶ——乃木院長の感謝——聽衆をして飽かしめざるの妙味——たわけと田分

▲博士の演說の特徵は（第一）東西の學に通じて居りながら、其說く所他の學者の

如く面倒なる、乾燥無味なる談義に流れずして、常に常識に訴へて、聽衆全體をして、悅服せしむるの力を有して居るのである。(第二)當世の演說家中、博士の如く超脫のした演說をなし得るものは、他に無いと云つても可いのである。其說く所は通俗なるが如くにして、然かも下品ならず。卑近なる例證を用ゐて、猶聽者をして尊敬を拂はしむる所のものは、實に博士の演說の大特徵であつて、これ畢竟博士の人物の、圓滿なるに基因するのであらうと思ふ。

▲又博士は、必ず明瞭に正確に、其所信を說き、少しても御諛辭に流るゝやうな事がない。譬へば、自己の信ずる宗敎とか、敎育とか、若くは社會上の意見を發表するに當り、其聽衆中に、如何なる貴顯紳士が居らうとも、更に其主義を枉げず、堂々として論議せらるゝ所は、決して尋常一樣の演說家にあらずして、慥に人を敎導啓發する說敎家の資格を、十分に有して居らるゝものと謂つべしである。

▲嘗て學習院に於て、演說をされたことがあつたが、それは貴族の弊習を說いて、子弟を誡めた時に、聽衆中には其父兄も在られて、聽者をして手に汗を握らしめたことがあつた。流石の乃木院長も、此遠慮會釋もなき演說に、多少困つたであらうと思はれる位であつた。所が博士が壇を下ると、乃木院長は、ツカ〳〵と進み出て博士の手を握て『實に有難い。吾心に思て居たことを憚からず述べて下されて實に嬉しい』と、謝辭を述べられたことがある。

新渡戸博士の演說振

▲又東京博覽會に就て、批評されたことがあつた。千家東京府知事はスルと文部

省へ往つて『高等學校の校長をして、彼樣なことを言はれては困る』と云つた時に、博士は『新渡戸一個人の意見として發表するのに何の差支へがあらう』と言つて更に怯まなかつたと云ふことである。これは教育家の美談として、當時の新聞紙で世間に傳へられたが。斯う云ふやうな事は、當今の學者に望むことは出來ぬ事である。

▲演說中、折々滑稽を交へて、人をして頤を解かしめ、聽衆をして飽かしめざるの妙も亦博士の特徴である。人によると博士の演說は、滑稽に落ちて不可ぬと云ふが、余はさうは思はぬ。嘗て一つ橋の報德會で、博士の所謂地方――即ち田舍に關係のある制度なり、農業なり、習慣なり、其他百般の事に付て、田園生活の宜いことから、進んで精神修養の事迄、五六項に分けて話されたが、只其中に『たわけ』といふことは、先祖傳來の田地を人に分けてやるから、田分と云ふのだと言はれたのが、耳立て聞れた位なものだ。

（下）

――人格の人亦主義の人――所說適切なり――一流の演說家たること は爭はれぬ――紳士の好モデル――新渡戸は適切、蘇峯は多趣味

▲博士は人格の人であるけれども、又主義の人で、其主義人格が、自然に演說に見はれる。これ即ち人として、其說を傾聽せしむる所以である。それから又博士の演說を一言に云へば『其の說く所、誠に適切なり』と云うて可なりだらうと思ふ。其適切と云ふのも、單に常識の上より來るのみではなくして、畢竟東西の學に通じ、該博なる智識を有する所よりして、自然正鵠を誤らぬので、之れが遂に人をして、適切に感ぜしむる所以の原因であるのだ。

▲態度も、悠揚迫らず、能く落着て居て、非難すべき所は尠い。音聲も德富蘇峰氏に較ぶれば更に好い。大雄辯家と謂ふほどではないが、當今第一流の演說家である ことは爭はれぬ。之れを譬ふれば、規律正しい良將が、隊伍整然、旗鼓堂々、敵陣に臨むが如しとでも謂ふべきであらう。

▲若し强いて缺點を言うなら、博士の演說は、聽衆に深き印象を與ふるといふことは、どうであらうか。人を幽玄の境に導くと云ふ所は、先づ缺けて居るかと思ふ。故に神秘なる點を求めやうと思ふならば、博士の演說に於ては、絶望せざるを得な

い。譬へば山高く海濶しといふやうな、大雄辯家としては、又大なる缺點を有して居て、さう云ふ側の方は望むことが出來ないだらうと思はれる。

▲人物と云ふ上から云へば、日本の武士道の精神を有して居られるし、又泰西の宗教基督教の精神も有つて居る人で、それに文學の素養も深いのであるから、其處が即ち社會の尊敬を受くる所以であらうと思ふ。由來武士道の精神を有つて居る人は、頑固しく、文學思想にのみ傾く人は、柔弱に流れ易く、宗教家は偏僻であるが、博士は比較的、圓滿に調和されて居る。今日の社會に於て、紳士として之を求むれば、博士の如きは確に一の好模型であらう。

▲大學の教授とか、宗教家とかいふ人の手に成つて居る、倫理教育問題の研究會があるが、其會の人々で、今の社會の精神改造者として、普通の俗身講談でなく、倫理教育の說教者として、全國を遍歷せしむる資格があるものは、先づ第一に指を博士に屈せざるを得ない。博士は其最適任者であらうと云ふ評判である。

▲博士と蘇峯氏とを比較すれば、博士の演說は、事に適切である。蘇峯氏のは多趣味である。蘇峯氏の演說は、始めから終りまで文章であるが、博士のは如何にも超脫がして、嫌味がない。一は人格の人で、一は精力の人と謂ふことが出來るのである。

▲博士の辯舌は、比較的緩やかであるが、何處かゴツ〳〵とした調子があるから、一寸速記し惡くい。博士は隨分思切つた事を言はれるので、文部當局者などから、彼是言はれるのが夏蠅と見えて、教育會などから依賴されて、演說される場合にも、會の幹事が『諸君、是から第一高等學校長新渡戸博士の御講話がありますから淸聽を請ひます』とウッカリ紹介すると、博士は壇に上つて『會長並びに諸君、唯今幹事からの紹介に、第一高等學校長云々と言はれましたが、私は今日は、新渡戸一個人の資格で參りましたので、高等學校長の資格ではないのでありますから、一寸御斷りして置きます。高等學校長として、彼樣事を言つたかと、又世間から彼是と批難されると困りますから。』と態々御斷りになるが、これは誠に御尤の事であるのだ。

現代名士の演說振終

明治四十一年八月十日印刷
明治四十一年八月十日發行

定價金四拾五錢

著者　小野田亮正
東京市日本橋區本町三丁目八番地

發行者　大橋新太郎
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

印刷者　飯田三千太郎

發兌元　博文館
東京市日本橋區本町三丁目

現代名士の演說振り
著作權所有

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場印刷

博文館編輯局編纂

祝辭演說法

全一冊洋裝大判美本紙數二百五十頁

▲正價金貳拾五錢＝郵稅金六錢

口繪：木版彩色畫（寫眞銅版）●英國議事堂全景と其上院內部●佛國下院內部●吹上御苑內紅葉御茶屋と池●見御茶屋●芝濱離宮●日清戰爭●臺灣占領●凱旋軍隊歡迎●本願寺吊慰會●支那廬山內鄱陽湖●北京入城の內盧溝湖

公會の席、祝辭は式側の一として欠くべからざるもの、本書先づ事に依り例に準じて祝辭の作法、文例等を詳叙して之を作るもの、則讀するものに材料を供し又演說法として雄辯美辭の性質、作法、用例等を明示す。演說は文章と百代の業なり、思を述べ志を行はんとするもの、之に待つ所多し。況んや集會講話彌々盛を加へ立憲の制度益々進むに從つて、演說の必要年一年より急ならずや、時勢に後れざらんとするもの須く本書を一讀すべし

◉中島

君著

祝活法

附（小判二二六頁）演說法名家談　正價參拾錢　郵稅四錢

坪谷善四郎君著

演說討論軌

▲全一冊洋裝中判▲紙數三百頁▲正價金參拾錢郵稅六錢

寫眞銅版肖像口繪

▲侯爵……伊藤博文君
▲子爵……谷干城君
▲法學博士……鳩山和夫君
▲伯爵……大隈重信君
▲男爵……金子堅太郎君
▲……清浦奎吾君

言論自由の天地に棲息して而して其利器を應用せず空しく人後に瞠若するに至つては是れ活世に處するの人とはいふべからず利器とは何ぞや所謂演說討論是なり然れども其術に拙く共用を知るも其術に拙く愚論妄說の爲に敗を取者あり本書は之を指導し其精神を貫かしむ

（博文館發行）

17
328

17
328

004355−000−3

17−328

現代名士の演説振

小野田　亮正／著

M41

ACE−0802